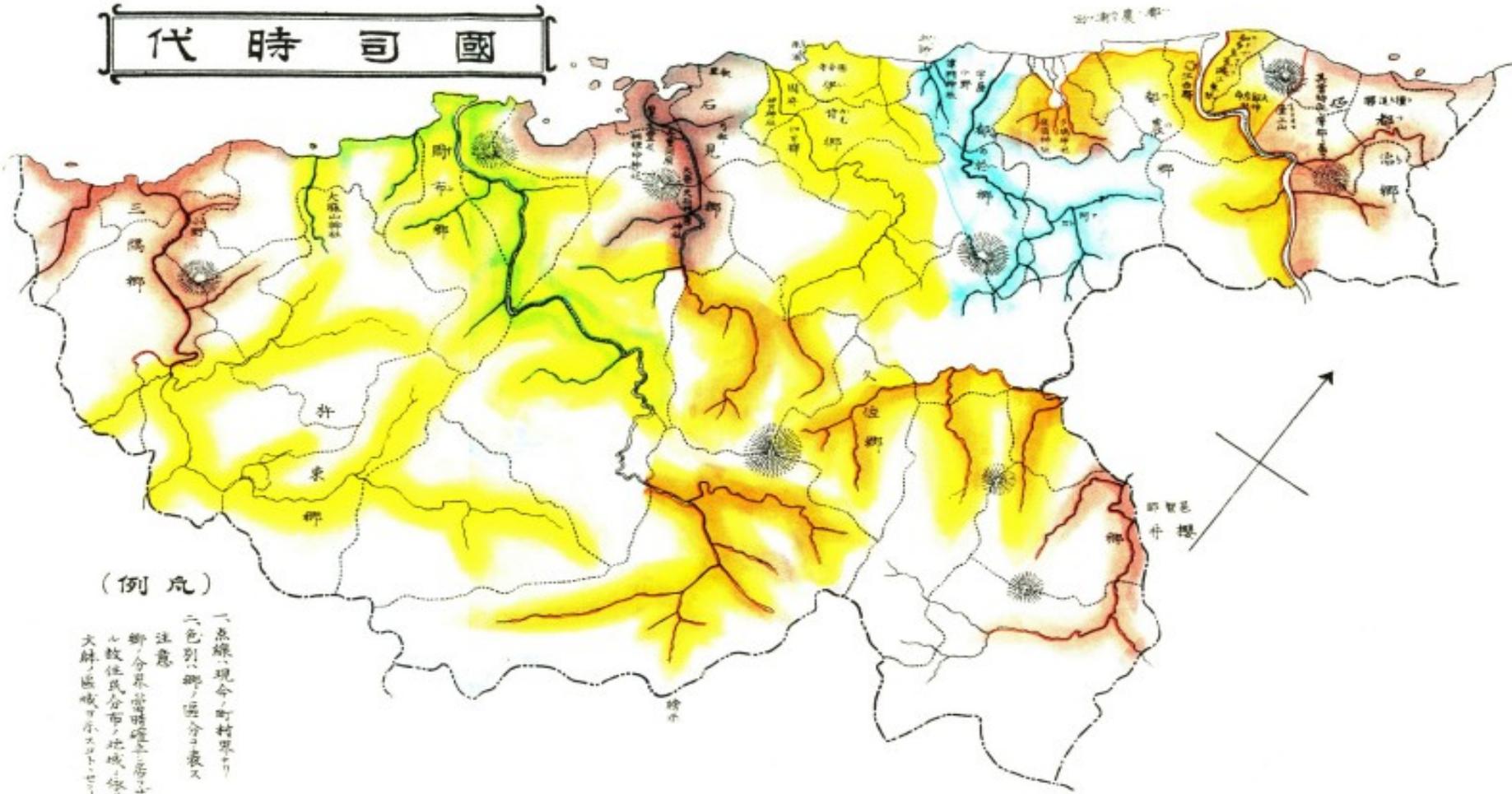


《 那 賀 郡 誌 》

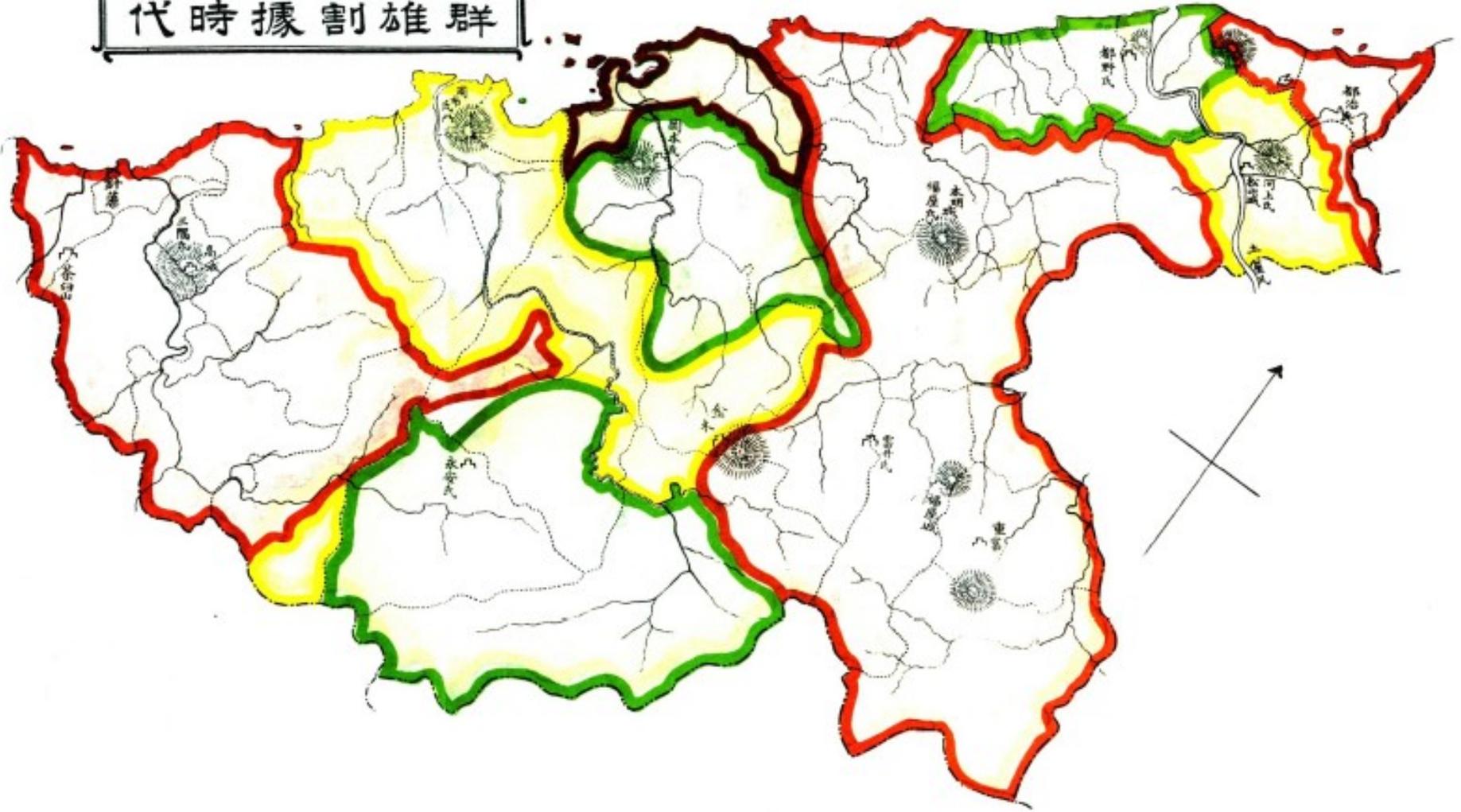
國 司 時 代



(例 凡)

- 一 点線、現今、町村界
- 二 色別、郡、區分を表ス
- 注意
- 一 郡、分界當時確定し居テ、
- 二 故住民分布ノ地域、條
- 三 大群、區域、小、マ、ト、セ、

群雄割據時代



第3編 處 誌

1. 浜 田 町

^{かんじん}寛仁四(1680)年、中納言常方下向し、石見郷の浜辺を開きて田となし、以後、浜田と言いたりと伝う。大名時代、城下の名を浜田と云う。公に云うは八町(紺屋・新・蛭子・片庭・門ヶ辻・檜物屋・辻・原)のみなりしが、市町村制実施の際、原井・浅井・黒川三村の内、従来俗に浜田と云い居りし部分の大方を加えて浜田町とせり。

浜田町は、県下唯一の貿易港、県下唯一の測候所、県下唯一の驗潮所の有る所、且つ県下第一の漁獲高を有する所にして、石見の中央に位する那賀郡の中央なる市街地即ちこれなり。町内由緒ある社寺多く、松原よりは、清助・八右衛門・西坂彦太郎の如き人物出でたり。

◆式内石見天豊足柄姫命神社

浜田の中央に在り、今県社にして、石見の字を冠せず。俗に岩神^{いわかみ}と言う。境内に歴代城主之碑あり。社後に演武場あり。蓮池あり。社前右手に郡役所あり。津和野藩邸の建物を解きて、高津川を下し、海路此の地に輸し。浜田県庁として建てたるもの是なり。

*津和野・浜田の瓦は、互に其の葺方を異にせるを以て、二種の出合いし所、塀の屋根にて、^{すこぶ}頗変態を呈して相対せり。来歴変遷工芸家の研究を要す。(中村直忠)

◆浜田湾頭

松 の 舎

柳窟あたり春たけて	花爛漫の桃の風
瀬戸ヶ島姫山がとの	派手を競ひの夏まつり
淡島山頭秋ふけて	月冴え渡る鶴島や
星眸爛たる冬の夜を	立てり馬島の燈明臺
霞のあはひ霧のひま	折々見ゆる高島や
白帆行きかふ海の上	四時の眺めぞうるはしき

眺妙へなる外浦港、舟にて遊ばゞ尚更に佳。更に扁舟を僦りて馬島燈台に行くべし、島は三澤氏の私有なれど、遊園地として公衆の清遊に任す。景勝多く、馬島八景の称もあり。

◆亀山

旧藩侯の私有なれども、全山を開放して遊園とす。大名時代は、浜田領六万千石の主の居城ありて、
城樓高幾仞 粉壁映江潭 中有千松茂 四時鎖翠嵐
たちつづく 松間はれたる 亀山の 朝くま嵐 枝ならさず
と吟詠せられし所、慶応二年落城、見る影もなき様となり、はては菜圃桑園と変り、
荒果てし城は あやなの花盛 あはれ胡蝶の 夢の浮世や
と彼狡童は居らねども、空しく箕子黍離の嘆を発せしめしが、明治三十四年九月公園となれり。
面積 2,490 坪。西麓に松平子爵邸あり。今上陛下が、なお皇太子殿下にてましまし、折行啓遊ばされし御座所あり。

将 發 浜 田 有 作

小 林 天 龍

陪従鶴駕欲三句、偏感山陰民俗淳、峩艦如城遙壓海、皇風浹地不揚塵、
乾坤萬里雲霞色、草木千年雨露春、喜極簞壺還有淚、普天率土即王臣。

◆三重之河原

万葉集に、『吾豊三重之河原之磯裏爾如是鴨跡鳴河蝦可物』と書かれ、壬生忠岑に「石見瀉三重の河波立かえり水(見ず)にはいかし(行かじ)山吹の花」と詠まれ、或は季経、和泉式部等の言の葉草に残れども、実の一つだに七重八重、花も葉も根も無く蛙の、唯かしましく騒ぐのみ。二重橋を拝まぬを、いと口惜しと云いけるに、さてはせめてものあきらめに、三重橋を見られよと、滑稽の材料に供えらるゝに止まるこそ悲しけれ。

◆女の多く参る粟島祠の後を少し行けば檜が浦と云うあり。遠浅にして海水浴に適す。祠の下に宝福寺あり、札所にて「わけ登る峯に立まう雲はただ鶴の林にまがう山寺」と歌えども、登ることもいらぬ平地なり。祠

の前に大歳神社の女坂ありて、そこに烈婦薩女之墓あり。

雪浪啣崖角、噴出螺々青、餘勢打天碎、飛帆帶微腥、乗槎欲逐影、雲涌雨冥々。

瀬尾旭東

大歳神社境内は、常に清潔にして眺望絶佳なり。男坂は急にして老幼婦女に上下し易からず。毎年七月須賀神社の神幸社の神幸此の社に行われて、一週間の夜祭あり、毎夜雑沓を極む。

◆親鸞上人面授二十四輩の旧跡願正寺、古田侯の墓ある宝珠院、高田山玉林寺、指方山光西寺、其外緒ある寺院少からず。

◆出寄留より入寄留多き所は、繁華なる地なりとの言当れりとせば、浜田は都会たる資格を有するならんか。出寄留一千二百人にして入寄留二千人（但し兵卒を含まず）。入寄留多き地は、県下他に松江市今市町あるのみ。

◆缶詰 年産額六万円、生糸十一万円乃至十六万円。

2. 石見村

古の石見郷の地なれば村名とす。

宮には三宮八幡宮、寺には多陀寺来福寺、古城跡には三子山、袂の里は歌名所、公共事業に尽ししは、前に鯉塚新右衛門、後には高野七右衛門、柿木山の国有林、陶器工場名も高し（陶器年産額六万円）、浜田聯隊と一口に言えど、第二十一聯隊兵営、衛戍病院共此村に在り。

^{やまとぎ}八幡登座の上の八幡宮も此村なり。旧藩侯の菩提寺なる妙智寺長安院も、信徒の多き真光寺も、姿やさしき二本松、桃花のやなぐつ今井迫、芝居にて名だゝる鏡山、眺めは尽きぬ不老園、夜さでに獲物多き長磯、蛍とびかう小石川等、数え来れば、浜田名所の大方は、此の石見村の内に在るなり。

◆大祭天石門彦神社

あめのいわとひこ

千年前既に式に載せられたる旧社にして、三宮明神号を勧請せられしは四百年前なり。代々武将の崇敬厚く、今県社たり。

◆多陀寺

真言の古寺にして、記主禅師の修養せられし所、かねて札所なり。『ただ頼の大悲の誓深ければ、善きも悪しきもいかでもらさん』と詠歌流して巡りしは昔のこと。今は初午に参拝者多く、寺後の眺望甚だ佳なり。

◆鏡山来福寺

これ亦真言の古寺にして、善那先生之碑、岡本道女之碑あり、道女は芝居に上る鏡山の尾上なり。事は享保九年四月三日江戸の浜田藩侯邸にてありけるを、享保十一年建碑せりと言う。今より百三十余年前天明元年河龜助作「加賀見山さとのききがき」と題して、大阪中の芝居の歌舞伎に演じ、後中村魚眼浄瑠璃に改作せり。翌天明二年には、加賀騒動に付会し、「加賀見山故郷の錦絵」と題し、江戸外記座にて、あやつり及び歌舞伎に上ししより、其名天下に轟けり。

義女幽魂去不還	北邸何処草叢間	杜鵑声洩干行涙	豈説悲風古鏡山	日	州	立巖	小史
秋闌蟲咽欲斜陽	賢婦碑前三灼香	辭世藤花歌一首	教人墜涙百千行			渡邊	周南郎
故郷に錦あやなすかがみ山	くもりなき名を代々に止めて			文学博士		末松	謙澄
後の世のひとのこゝろのかがみ山	たかき尾上の松のみさをは			熊本		岡川	末童

◆高野七右衛門

てんぼう

天保二年三月黒川字河内に生れ、明治十九年六月十七日同地に死す。資性温厚仁慈貧慾にして事理をわきまえぬ母に事へつつ、力を公共事業に尽し、かねて貧民救助をなせり。

- ① 道路修繕 唐谷坂は、険峻なりしが河内住鯉塚新右衛門之を修理し交通の便をはかりし故、元二年報徳碑を建てて其の功を頌せしが、明治五年の大震災に道路大破損し、通行する能はざるに至りしかば、七右衛門は更に大々的修繕を為し、道路の中央所々に石を敷きて交通に便せり。

- ② 橋梁架設 唐谷坂より降りたる此方に、昔は河筋に屈曲して河内下迄に三個の小橋あり、洪水に流失すること度々にして、損害少からざりしかば、如何にもして此憂なからしめんと、河筋のつけかえに苦心し、中間に長九間幅七尺五寸の欄杆附橋を架し、且つ将来を慮り橋梁の桁用として字隠し畑に杉樹を植ゑ、架換えの費として字寺山に上田三畝歩を寄附して河内谷共有地とせり。明治廿年二月知事より木杯を賜せられ、廿五年河内区一般より寄附地の中央に故高野七右衛門氏之碑と書せる記念碑を建設せり。
- ③ 仁慈 村内り、貧舎に米或は鹽を施与せしこと屢々なり。

3. 上 府 村

古の伊甘郷にして、中古国府^{こふ}を置かれし期間長ければ、いつとなく国府^{こふ}と云うに至り、後上国府・下国府に分かれしを、国の字を省きてかく元の名に呼び做せり。村の中心点国道筋に府中橋あり。

◆八幡宮

仰げば郷社八幡宮を拝すべし。同社納附の大般若経は仁治元庚子(1900)年より延慶二己酉年に書写せしものなり。明応元壬子(2152)年四月十五日、益田貞兼宗兼より額面を奉納せり。

◆安国寺

府中橋の西、前に一大老松のある寺なり。山々を伊甘山と云う。草創は和銅中なりと伝うれど明ならず。天台宗起るに及び、其宗旨を奉じて、福園寺と云う。正和二癸丑(1973)十二月八日、阿忍、福園寺を禅院に改め、其湯沐邑田畑若干畝を寄附す。阿忍は、御神本六世兼時の嫡子にして七世たるべき益田兼長の室、夫早く死したれば、尼となり宗を改め寺を東福に隸す。此に於いて殿堂・山門・輪藏及び鐘楼・鼓楼・方丈浴室等所謂七堂鬱乎として薨起り、曹溪・南嶽・如意・曇華・幸梅の五院参差として之を園繞し、一大禅刹を成せり。此に於て東福寺雙峰国師の弟子石門義和尚を請うて開山第一祖とし、阿忍を福園寺中興檀那となす。三十五年を経て貞和四年正号正平三年足利尊氏当寺に安国の通号を加え宝祚長久国家安寧の祈祷道場とし、安国福園禅寺と称す。故に尊氏を安国の開祖とす。末寺には常

福・靈泉・良昌・・東光・洞泉・保寧・萬壽・慈雲等あり。安国寺は元禄享保の札所なり。

生れ行く 安き御国を いのる身は わけてぞたのむ のりの教を

◆此村陶土多く、陶器製造盛なり。石見八重葎に国府大根は味優て佳しとあれば、地味適せるなるべし。浜田市街を近くに控え居れば、改良野菜を一層盛に作るも、村益の一助ならん。

4. 下 府 村

元伊甘郷なりしに、久しく国府ありし故地名となれるが、後に上下に分れしなり。^{しもこう}下府より^{こくぶ}国分わかれ出でたり。大化改新の際石見全国を治むる国府を、伊甘郷に置かれたるが、今の下府村小学校の前字御所の地なり。国府の地を御所と云うは穩ならぬ様なれど、備中阿波にも例あり。御所の近傍に御所池あり、伊甘川とも云う。深四尺、東西十五間、南北四間、常に清水湧き出で、鯉魚多く遊ぶ。

◆伊甘神社

国府の跡及び御所池に隣れり。式内社にして、^{あかむのおびし}猪甘首の祖神を祭れり。俗間に^{みぞくいひめ}溝織姫を祀れる由書けるものあれど、^{みぞくいひめ}溝織姫の誤ならんか、さるにても、由緒定かならず。境内に大銀杏樹其の他古木あり。

◆光明寺

真言宗にして、天平十六年聖武天皇の皇后光明子の建立と伝う。学者は、聖武天皇の御願によれる国分僧寺なる金光明寺ならんと推測す。寺地は度々かえたるものにて、もと泰林寺の地に在り、吹上に移り、遂に今の地に転したりと。

古寺地より古瓦出づ。蓮紋丸瓦の出づることあり。

札所にて、次の如き歌額あり。石陽三十三札所 六番 良松山光明寺

心にも 移る光の 明かな 願ふ佛の みかげなるらん

かんえい
寛永二年酉二月十八日

5. 国 分 村

国分寺あれば村名とす。もと下府の中にて、寛文四年(2324)印知集には載らざるが、其後の書類には国分寺村とあり。八重葎には伊甘郷内国分村と書けり。明治二十三年久代くしろを併せたるも、尚国分村とうがねと称う。唐鐘は大字国分の一宇なり。

本村は、上府下府に比して、後れて独立せる村ながら寺には石見国分、宮には式内櫛色天蘿箇彦命神社、其の他景色優れし床の浦等あり。二百五十六年前種々なる法を案出して開拓事業に腐心せし尾崎藤兵衛、宇津三郎右衛門、同八郎左衛門等をも出し、現に漁業採藻業務に励みその名高き、唐鐘わかめ若布売る女は、重き荷物を肩に、中国山脈を股にかく。真に後生恐るべし。

◆国分寺

聖武天皇の御願によりて建立せらる。天平の末年(1408頃)より暫くの間、邇摩郡に在りし寺を以て国分寺に充て用いられしが、後に此処に新築せられきと伝うれど、明らかならず。研究者の言によれば、国分尼寺なる法華滅罪寺たるべしと。其後廢絶したるを、永禄四(2221)酉年、福屋肥前守、福屋小太郎再興す。

永禄十二巳年、福屋隆兼の再挙の時、此寺の新蔵主、廻文を持ちまわりしが、毛利方の将森脇市郎右衛門に捕えられ、寺再び廢絶に及べるを嘉永年間、曹洞宗龍雲寺の隠居之を興復す。堂前の納経塔は跡市澤津満知女の発願にて、其子忠右衛門、親族熊谷三左衛門、石田友右衛門等の建てしものなり。

此等の辺より真宗金蔵寺こんぞうにかけて、布目瓦出づ。金蔵寺は、古の国分寺の金堂の有りし地ならんと推定せらる。

◆櫛代天蘿箇彦命神社

くしろあめこけつひこのみこと
けだし神代の古祀なるべきが、後の殖民皇別櫛代造くしろのみやつこの祖彦姥津命ひこをげつと習合せしものの如し。何れにしても、

久代地方と離るべからざる神にましまして延喜式に列せり。願主は稲葉屋利兵衛なるが、近代大蔵神社の地に移転せり。

◆床の浦

豊ヶ浦とも云う。古登多加磯は此処にあらず。「石見の海底のいくりに、此所豊千枚敷けるが如く、敷合せの如き溝ありて、世にも妙なる所、得もいわれず。遠眺は云うも更なり、穴観音とて岩穴に仏像ありて、そこを舟にて潜き行くに、何もくれも、世に知らずなん」、と書けり。

飛田守黒の詩に、

萬松影落九重淵 碧色夏寒凝翠煙 請見天工鑿妙 時々浪去石如筵
と在る結句は、明治五年地震前の景にて、今は何時も石筵の如し。

小夜ふけて 通ふ千鳥の声すなり	たが住む床の 浦路なるらん	(後醍醐帝の宮人)	爲	子
佐保姫の 床のうら風 吹ぬらし	霞の袖に かかる白浪	右大辨	藤原	光俊
寐られじな あまの刈藻を 枕にて	こよひふすみの 床のうら風		頓	阿
面白き 石見の海の 海邊にも	豊がうらに しくうらは無し		伊藤	祐命

◆宇津八郎左衛門

元禄の頃久代に住める人にして、開拓家なり。曾祖作左衛門、波子村宇津の地より移り来り、彦惣を経て三郎右衛門に至る。三郎右衛門は八郎左衛門の父にして、其代より久代村庄屋を勤む。開作田畠二町八反歩は。父祖累代の勤功なれど、主として三郎右衛門の手に成れる物の如し。尚、沼沢蘆葦叢生地残り。此を引き受けて成功せしが即ち八郎左衛門なり。

延宝三(2335)卯年より元禄十六(2363)末年迄廿八年間、早出晩帰、起てば働き、坐せば考え、夢寐未だ会って忘れざりしが、万全の目論幾度か挫折して、あわれ其業至難に属せり。当路其労を認め、元禄十六年未七月廿三日、新開所杭柵用として御免除山仰付らる。八郎左衛門益々奮励し、遂に田畑七段歩余を開作せり。功は前の二町に劣らざるべし。加え排水防水防風防砂に至る迄、注意到らざるなし。かくの如くにして、初めて祖先の開作地も終を完うするを得たり。正徳二年辰六月五日死す。母喜翁妙観大姉賢婦人なりきと云う。

其墓は、黒川村字宇津與七郎、三宮石にて建てたるが、貞享二乙■十二月四日の文字辛うじて読まる。與七郎は八郎左衛門の同胞なりと云う。八郎左衛門の子平右衛門は、久代村庄屋なるのみならず、波子村高田村の庄屋をも兼帯せり。後裔喜代太郎、彦惣と改名して現存せり。與七郎の後裔は、黒川村或は原井組割元を勤めき。当主を宇津爲太と云う。

◆尾崎藤兵衛

谷田家^{やだ}の祖にして資性剛万、大蛇の棲むと云う広く深く物凄き谷田池^{やだのいけ}を埋立て、内は勤儉産を始め、外は汲々として公益を図り、国分村独立の素地を作れり。其開作を始めしは、承応二(2322)巳年にして、開作地の検地を受けしは、寛文二(2322)寅年なり。其間十年の苦辛経営の跡は、谷田家の古文書を見て察すべし。代々庄屋を勤め、殊に跡市組浦役は多く同家に命ぜられき。後裔谷田古藤吾は現に^{かくしゃく}夔鑠たり。

6. 川 波 村

明治廿二年、敬川の川と波子の波とを合せて村名とせるなり。古くは出雲の植民地なりしが、郷名立つに及び、東部は都濃郷に、西部は伊甘郷に属せしを、和名抄の頃には既に戸口^ふ殖えて宇屋川筋分郷し、都於郷^{つのへ}となる。本村の地は全く其中なり。寛文(2324)印知集には高田村波子村宇屋川村とあり。明治八年高田を波子に併せて波子村とし、以て市町村制実施の時に至る。

◆波子^{はし}

垂仁天皇^{すいにん}の朝、出雲より土師^{はし}来往せしが、後に地名となれるなり。姫神の漂着によりて波子とな名づくると云い、箸にて姫の入りませる箱を開きし故に箸と云うと説くは、共に付会^{ふかい}なり。郡史第二節三節を見るべし。文字は種々にて、日御崎文書には波志とあり。懷橘談には橋と書けり。波子の文字になづみて説を立つべからず。(現今陶器年産額一萬余円)

◆^{つと}津門神社 上古^{はし}土師^{つへのやしろ}に津門神社あり、宇屋^{やまのへのやしろ}に山門神社ありきと云う。いつの頃よりつとと呼べるが、蓋し^(おそらく)小野族植民以後ならん。其式内たるは論無し。敬川の妙見社に山都神一名山門権現居まし、山下^{やまと}に山門原^{やまと}あり、前夜の祭礼を山邊祭と云えば、これが山門神社にして式の山邊神社ならんと云うに就ては、他(江津)に論社ありて決定せず。大和の宮戸は、古みやのへと云い、今みやと云う。式に列せられたる津門神社の祭神は、小野族と同族なる津門首の祖米餅搗大使主命にましまして、出雲系の女神を祭れるは、境内社なる早脚神社なるを、一般人民は、本社が女神にして境内社が中村一派(小野族)の祖神なりと思えり。蓋し上古の様は一般人民の思える如く、女神が主にて祖神が客にましけるを、中古式に列せらるるに際し、皇別なる祖神を主となししものの如し。(当時上流に位せる小野族の所為が、政府の意によるか)

◆烈女 於つる

鶴女は宇屋川村の産なり。出でて有福村中西と云う家の下女を勤む。已年(正徳三巳か、享保十巳か)^{かんぼつ}の早魃に、有福村にては、川一面に堰を築き、一滴の水も漏さず、己が村内に引用す。下流なる宇屋川より其不法を責むれども肯わず^{うべな…承諾しない}。果は飲用水も缺乏し、田面は亀裂し作物は多くは枯死して、人畜の生命亦旦夕に迫れり。鶴女一夜番人の隙を伺い堰を破壊して水を流下せしむ^{けつぼう}。有福村民驚きて修繕し、昼夜警戒を厳にす。下流の民、又苦む。鶴女見るに忍びず、身を挺して復堰を破壊し、番人に発見せられ、走りて宇屋川村に帰る。有福の者追跡し捕えて之を殺し、其首を持ち帰らんとす。宇屋川村民相集りて之を追い、妙見山下にて追及び其首を取返せり。鶴女の殺されし地は、今に至る迄、鶴が^{なわて}睨、於鶴が森の名を存す。村民其功を思い其心を慕い其惨死を^{あわれ}憐み法会を営み、当時川筋に多く田地を持てる、橋詰(千代延氏)仁井屋(横田氏)山城屋(川上氏)表屋(本藤氏)等相謀りて、其霊を黒木神として祀り、大歳社にて神職と四家の主人とが年々行いし祭典の古式あり。鶴女の針箱を半紙にて包み、元結にて結べるものあり。毎年包紙の古きをば針箱の中に納めて新しきにかえる例なりし故、其数にて二百年許り祭祀の続けるを知れり。

◆^{ぶんせいてんぼう}橋本三兵衛 橋詰平右衛門の三男にして、本姓は千代延。文政天保時代の冒険家にして大志奇才あり、兼

て算筆に達す。竹島事件の首謀者として江戸にて殺さる。其伝は郡史第七節に詳なれば省く。

◆皇太子殿下御休憩所(御便殿と称す)

明治四十年山陰行啓の砌御立寄の幸栄を得し所、敬川河畔古松蔚^{うつ}蒼^{そう}たる間に在り。

7. ^{にのみや}二宮村

多嶋神社を、古来石見国二宮と云う。村名これより出づ。古昔神村^{かむら}は神領、神主は神職領、飯田は大炊寮用の米を進献せし地なりと云う。

一村内に式内神社二社(多嶋・夜須)を有するは、郡内に例なし。都濃郷の本場にして、火塚と称する太古の遺跡を有すると共に、現在郡内第一の砂防林を有し、将来を期して村有造林を為す。殊に吉野朝廷の忠臣都野神主を生みしは、永く誇りとするに足る。唯波根中山のそれに次で恐れられし青山狐が、文明の光の増すにつれて、其威を失いしこそ是非なけれ。

◆多嶋神社

式内社にして、県社たり。積羽八重事代主命を祭る。大国主命の子にましまして、俗に恵美様と称うる神なり。国造時代、出雲民族植民地方開発につれて、祭られたまいしなるべし。

末社は、東は渡津より、西は宇屋川にかけて数多く、神職大崎、宇津巻、二家別当松本坊、大寶坊、千田西の坊等五院ありて、甚だ隆盛なりき。此社の神職が、優勢なる武家方に抗し、吉野朝廷に忠を尽し、は、帝国大学編纂の大日本史料に載せらる。大崎氏は都野氏にして、宇津巻家は征西將軍宮に付きて西南海に活動せし河野通直の二男通之の後なるべし。

◆二宮村荒廢地砂防林

全く不毛の砂丘にして、風雨につれて年々位置を内地に移し、一朝大雨降る時は、直に洪水を出し、人畜の害を受くることも少からざりき。今より凡百年前の暴風雨の時の如き、三之助と云う馬子は、通りかゝりて砂に埋められ、馬のみ悄然と死せる主人の側に立ち居りしことあり。此は三之ジケとて人口

に脛灸かいしやせる(知れ渡る)所なり。此の時飯田の耕地は大部分埋没し、神主・都野津の損害も甚しかりしを、浜田頭正寺と云う城主松平周防守の信頼を受け居る寺の住職、都野津に出張し、率先修復に勉め、人を諭し、数年の後、漸く旧觀に復せり。近くは明治三十七年の如き、一婦人洪水に流され、浮きつ沈みつせるを、吹金原兼四郎辛じて救助せるあり、されば砂丘に植樹せしこと古来度々なりしが、成功せざりき。

明治三十九年同村学事会開催の際、学校林設置の議出で、同所に植樹せんには、一挙兩得ならんとの説ありしも、古来の不結果に鑑みて、ためらう者ありければ、隣席郡書記福原磯助・技手の出張指導を受けなば、或は好結果を収めんかと説き、満場それに同じ、福原書記は帰りて猪股郡長に告げしに、郡長大に賛成し、技手森五郎を遣して、指導せしめたり。此時、村費より出し、は僅か金六拾七円七拾八錢四厘にして、他は学校児童及び村民の出夫にて済ませたり。此の時亦一度は不結果なりしかば、村内

ごうごう(やかまし騒ぎたてるさま)囂々反対の声あり、本藤某(仲間と云う家の老人)・吹金原兼四郎等、極力継続説成立に勉め、郡長亦大に援助し、四十三年度より県費の補助を得て経営し、遂に三十二町歩の植樹を為すに至れり。而して早く植えたる部は、既に繁茂し、若松の美林を為せり。(清地俊義)

8. 都野津村

今は湾内埋りて港津ならねど、古、都農郷の津なりければ、都農津と名づく。

二百五十余念前の寛文印知集には、正しく、然書けり。併し、昔人は、読み得れば足れりとなし、文字の如何に拘泥せざる風ありて、都野津、都之津など色々に書きしが、後都野津に一定せり。

海事思想今尚乏しき地あるに、既に本村にては、太閤朝鮮征伐の役に当り、進んで神主村の船役を引受け、且つ神主村の海上使用権をも取得するに至れり。是進取の英氣ある者にあらずんば能はざる所。都野津商人つのづあきんどの足跡天下にあまね普き所以、遠く其因なきにあらざるを知るべし。

◆都野津商人

大名時代、浜田領にて、市のよいのが牛市、田町、荷のよいのが都野津の商人と女子供に至る迄に歌い囃されし都野津商人、角帯端しく締めて紺前掛、甲掛脚胖のいでたち甲斐甲斐しく、紺の大風呂敷も裂けんば

かりに、而かも正しく包め荷を肩にせるは、問わずして都野津商人なりと云われしなり。今は自転車に飛び乗り分秒を争う商売の駈引、昔のいでたちとは稍異なれども、旦那と云わるゝ家に生まれ乍ら、前垂掛けて矢立を腰にし、算盤握るを敢て厭わざるは、同地の美風、在朝鮮群山港の高橋重勇の如き其例多し。「都野津商人の歩いた跡には草もはえぬ」とは、都野津商人の手を入れし地方には商人行くとも遺利(こぼれた利益)なきと云うなり。

而して都野津商人の奮闘振りは大阪の物を仕入て大阪人と競争し、広島のを仕入て広島人と競争し、能く勝を制するにて知らる。

◆瓦製造

盛にして年産額三万円に近し。

◆大年神社

式内神社なりと云う。正徳(二百年前)寛保(百七十一年前)の棟札あり。されど隣村都濃村和木及浜田町島崎山其他にも論社あれば定めがたし。元都濃郷大年免に鎮座ありしを、正徳元卯(2371)年、都山に移社せりと云うは、参考すべき説なり。

◆神松

人麿松、^{ひじり}歌聖松とも云う。松の大木にして、一見千年以上をも経たりと思われ、風姿優雅神在すが如し。伝へ云う、人麿の別邸ありし所にて、其妻恵良姫の墳墓の地なりと、隣村二宮村に恵良あり。相隔つること十町。万葉集に恵良姫の名無く、依羅娘子あり通常「よさむのいらつめ」と読めるが、「えらのいらつめ」と読みて同人なるべきか、或は別人か。

萬葉に柿本人麿のよめる角の里、角の浦は此地(都農郷)とす。高角と云うも同じくして亦此なるべしと信ぜらるれど、近世美濃郡の海辺に、其故跡を標榜(意味や解説)し、世に喧伝すれば今必ずしも異を立てず。(大日本地名辞書吉田博士)

9. 都 濃 村

古の都農郷内なれば、明治廿二年、和木と嘉久志と合したる際村名とせるなり、寛文印知集には、加久志村とありて、和木村と云う公称なし。角乃浦回の名は、一千二百年前、歌聖人麿に歌われて、世人の意を引きたり。当時都於分郷以前にて、宇屋の佐奈面あたりより都農郷一般の海辺を、角乃浦回とは云いけん。ことに和木の馬島は眞島にて、其あたりの景は、詩人の注目に値せしならん。星移りも物換り、名さえ忘らるゝこと数百年、突然露艦の投降により、再び世に紹介せらるゝに至れり。

◆露艦投降

明治三十八年五月廿八日、露国軍艦イルツイシュの投降せし地にして、今尚当時の記念品を在せり。事は郡史第八節に詳なれば略す。

海上肅々樹白旗、俄軍力尽乞降時、沙浜残艇隨波立、便擬當大捷碑。 小林 天龍

◆小川八左衛門

開拓家にして祖父宗兵衛普に父宗兵衛に継ぎて、天保十二丑(2501)年より開墾に熱中し、或は水利に、或は防風林に、専心意を用い、嘉永二酉年八月五日御盃拝領、翌三戌(2510)年、新開を完成す、相伝う七世之祖宗丹、後鳥羽院の御時当村に移り開墾を始めたりと。後鳥羽院の御時と言うは誤にして、実は千金の宗丹の戚族が大名時代の初頃移住せしならん。

爾來地を買い農を事とし、開墾を家是とし、数世の間に和木全部水上権に至る迄一手に収め和木の將軍と称せらる。

◆嘉久志防風林(松陽新報 天野濤之助)

「江川の水は無くなるとも沖田屋の身代は尽きじ」と歌わしめし江津沖田屋事横田氏七代五右衛門は、祖先の遺志をつぎ、宝暦年中居村の字新開及新田を開き、同十三年には嘉久志の開拓を企て現今国道よ

り浜手の耕地、字中新開沖新開を開きて一面の畑となししが、何分新に開きたる土地なれば、防風の備なきため、冬期西風烈しく折角の畑も一冬期を過ぐれば忽ち元の荒砂となりて人手を要すること多きを憂い、松樹を植えて防風林と成すに若かずと、直ちに之に着手し、村民に命ずるに、松一本の植付賃として米若干を与える旨を約し、又砂地には松の生い立ち悪しきを知り、遠く星高山の麓より植土を運ばしめ、大に之を奨励して数年の継続事業として之を完成せんとせしが、事業半にして昭和二年(2425)七月廿八日病を得て死せり。八代啓三郎父の遺志をつぎ、防風林を完成せるが、現今の保安林なり。これ畜に農作物を保護するのみならず、風景を添え気候を調和して衛生上利する所少なからず。

◆彫刻家 巖

いわおの名は、石見にては左甚五郎よりも喧伝せらる。而して其素姓詳伝に至りては、大正三年三月天壽生、大正四年一月野津天籟二人の発表によりて、始めて衆の知る所となる。

姓は清水、享保十八(2393)年出雲国玉造に産る。年十三飯石郡入間長栄寺に入りて僧となりしが師僧息安の許を得て、江戸に行き、予て好める彫刻を研究し、業を卒へて、一旦長栄寺に帰り、ひたすら彫刻を事とし、再び去って石見に入り、波根大森に駐る数年、宝暦中横田五左衛門の招待に応じ江戸に来り、遂に嘉久志清源庵に住す。

此処に於て妻帯し、明和元年巖三十二才の時長女尾の江生る。長浜村人形屋三代永見房造来り学び長浜人形の声誉を高む。巖又文学に思想あり、文化七年(2470)十月廿三日歿す。行年七十八才。子孫亦妙技あり。就中三代巖の作は初代と同視せらる。

二代巖 長女尾の江 號「文章」

長男阿多賀之助 長崎住

初代巖 清水富春

二女八千代 三代巖小川鹿造 佐四郎 森田善内

長浜の永見房造

川戸の源助

傘に吞まれて くくる柳かな
旅空に せこは知らずや 待きぬた
乳嘶の 顔からはなれし 時雨かな
積雪や 谷のそこから 立つ煙

離 桃 (初代の俳號)

◆陶器

粗陶器・瓦製造盛にして年産額三万。

10. 江 津 町

古都農郷の内なりき。都農は^{けだ…もしかすると}蓋し都野の意にて、郷内に舟津(江津・渡津其他)多ければ、都野と名づけけん。都野氏が近江津野より来りし故と言うは誤なること、津野氏の来りし鎌倉時代より数百年前和名抄に津農郷あり、それより尚数百年前人麿時代既に角の浦回あると長州都野氏の文書に「本姓は宇津宮藤原。久しく石見の津野に居る、依て氏となす」とあるにて知るべし。江津と云うは、江川の津なればなるべし。古の江西の駅は此村の内にて今の町より稍上流なりしならん。地名より川名生ぜし浜田川、下府川の如きもあれど、川名より地名生ぜし敬川、江津の如きもあるなり。

明治廿二年、千金村と郷田村とを合し、名の知れし港名の江津を村名とせしが、大正三年七月一日、町となれり。町制を施行せるは、郡内浜田と本町とのみ。

江津は、江川の西岸に在り、邑智郡の貨物物産は多く此川によりて吞吐せらる。車道邑智道あり、山口街道亦町の中央を貫き、水陸の運輸最も便なり。戸数七百、人口約五千。

輸 出、 百二十七万二千元。 木材・木炭・粗陶器其他農林物産、(町内製陶二万円)

輸 入、 七十二万六千元。 食塩・肥料・石油・穀類・雜貨

丘壓長江一閣高、登臨頓覺我懷豪、海門咫尺奔流急、日本涛通鞅鞅涛。 小林 天龍

◆鉄橋

中国第一の江川に架設中の鉄橋の長さ二百間のもの二、一は鉄道用他は道路用、竣功の上は地方の偉觀た

るべし。

◆神社

山邊神社は俗に江津祇園とも云う。式内社との説あれど、他に論社ありて一定せず。併し其祭礼の賑やかなる事は、地方に類なし。

神輿振は、元、山法師が神輿を奉じて入京せし風の、北国に移りたるを、江津の北国通いの船の者。之を見習い、帰りて、やがて近傍数村に波及せしなりと。

慶長の社領を見るに、千金祇園は三十石二升、郷田祇園は五石二斗五升なり。此千金祇園こそ、当時二宮、三宮、大麻山神社と匹敵せしものなり。

◆寺院

都野氏の菩提寺なりし普濟寺、元禄享保の札所なる観音寺、其他真言の古寺東向寺、浄土宗西暁寺、真宗其円覚寺等あり。島ノ星冷昌寺は廢寺の姿なれど、隕石あると眺望のよきを以て名あり。普濟寺は町の西北に在りて曹洞宗なり。群雄割拠時代、邑主都野三左衛門、龍雲寺第十二世龍屋和尚を請じて開山とす。徳風四方に被り縁日に集り遂に一方の禅刹となりしものにして、秀吉征韓の役、三左衛門家頼(陰徳作就勝)彼地に戦死せしかば、其家土遺骨を携へ帰りて此寺に葬り、寺領を寄付せり。当時の文書今尚、此寺に在り。

◆観音寺 臨濟宗にして、足利尊氏の建立なりと伝えるは直冬の誤伝なるべし、寺紋は丸二引なり。

詠歌。 月 航 山、観 音 寺。

有難や 月の光の 観音寺 導き給へ 弥陀の浄土へ

◆城址

千金の月出城、郷田の亀山城、共に都野氏の據りし所、津野氏が近江より来れりと言うは確かなれど、源頼義の裔新羅三郎義光の子孫となすは、大名時代中頃以降後の誤説にて、実は宇都宮(古く宇津宮とも書く)旧原姓にして、其祖系次の如し。

道隆

宗房一信房、石見都野氏之より出

北条兼家 道兼—兼隆—兼房—宗円(宇都宮座主)—宗綱(宇都宮氏)—朝綱
道長

近江中原氏

◆人物

都野又五郎信保の忠節、三左衛門家頼の武勇、横田五郎左衛門の新開と殖林、飯田儀兵衛の優雅、千代延伝九郎の築堤等伝うべきもの少なからず。

千代延伝九郎は有福村の人にして千金の里正たり、嘉永三年千金村沿岸の郷川堤洪水の為破壊し村民飢餓に迫りたる時官に乞いて救助米を得しめ且当人の企て及ばざる築堤方法を以て堅固なる堤防を造り田畑を回復し以て農民を安じたり。記念碑の文に曰わく。

庚戌六月、大雨洪水、河堤破壊、田園作荒原、加以連歳之凶、衆民凍餓殆将顛沛、村正千代延氏懇告之官署、即特功給以米二百六十斛、於是、興廢田、築壞堤、民皆復舊焉、噫氏之厚義、感戴不可忘也。因相與謀、勒之存石、永傳其偉功云、嘉永四年辛八月
千金闔村謹立

11. 渡 津 村

万葉集人麿の歌に、和多豆荒磯とあれば、ワタヅの名は一千二百余年前、既に存せしなり、和名抄時代の郷名は、如何なりしかと云うに、江川を境として、東は都治村と云えりとの説は大体に於て違わざれども、渡津と太田とのみは、都野郷に属せしならんか。

国司時代の江東駅は、本村の南部長田辺か。

渡津の荒磯とは、古の事にして、江川の水の運び来りし土砂は、積り積りて陸地をなし、開作されて田園となり、船つきは便となれり。邑智の輸出入品、此処を仲介地とするもの多きに至る傾向あり。邑智郡矢上銀行支店の設けらるゝ故あるなり。

此村に郡立農事講習所あり。又古は甘藷栽培に尽力せし青木秀清あり。今は渡米者の多数を以て県下に鳴れり(世間によく知られる)。

◆青木秀清

村内長田の医師なり。井戸代官の伝えし甘藷、栽培宜しきを得ずして其種幾んど絶えんと

せし時、秀清九州に行き、栽培の法を委しく授かり帰りて、之を諸人に伝へ、其れより蔓延弘布して、遂に今日の盛況を呈するに至れり。明治十九年立の渡津の碑には、秀清奮然薩摩に到りとあり、文化四年立太田の碑には、青木秀誠産術を窮めんとして長崎に赴き、耕作法委しく伝ふとあり。享保と文化との間六七年許の間に起りし事にして太田の伝真に近きが如し。

◆渡津村

渡米者多きを以て有名なり。在外国人に就て、県下の統計を見るに、那賀郡は県下第一、渡津村は郡内第一にして、又県下第一に位せり。次に其数を掲げん。

松江 107、八束 136、能義 40、仁多 31、大原 2、飯石 27、簸川 83、安濃 49、邇摩 124、邑智 193、
那賀 744、美濃 57、鹿足 84、隠岐 71 計 1618

渡津 135 人、浜田 130 人、邑智郡口羽村 90 人。

12. 浅 利 村

古の都治郷の内なり。浅利とは、アサリ貝の多かりし浦なりにし依りて名とせるか、浅利姫の歌によりてと云うは、本末誤れる説ならん。

浅利村は、其面積に於て、人口に於て、郡内中以上に上らず。しかも其名の高きは何に依りて、然るか。山に浅利富士あり。池に菰沢池あり。寺に浅利寺あり。才媛浅利姫あり。海士の子ながら雲居に上れり。

近くは、青池・梅日・湘雨・呉竹等の俳人を生み、是非の評は免れざるも天下に名を知られし島田在近在り。産業に熱心なるを以て藍綬褒章を受けし島田慎二郎あり。是其の所以か。

◆浅利富士

人麿の歌に屋上乃山とあり、又古より室神山と書けるを見れば、八神の里に属せしものならんか。されど現今、山頂は更なり、山の大部分浅利村に属する上、名さへ浅利富士と呼ぶこと多ければ、浅利の部に出しつ。其姿の秀麗なる、遠近既に見知りたれば、贅筆せず。

◆菰沢池

周囲二十七町、略々サ字形をなし、其水深し。浅利富士の東麓^{ゆうすい}幽邃(静かで奥深い事)の地に在りて風景佳なり。山形に因みて、火口湖ならんと思う者あれども、実は海跡湖なり。水草菰の生ずる沢の意なるを、虚無僧に付会して、種々の伝説あれど探るに足らず。

◆浅利寺

寺伝に行基の開基にて、本尊薬師如来は其手作りの由、言えど確証あらず。されど、其古寺なる事は、何人も否定する能わざる所なり。庭内に奇石あり、何等かの神秘籠れるが如し。大名時代の初め頃、黄檗僧鉄牛を出ししを以て名あり。又浅利姫の菩提寺なりと云う。

◆浅利姫

又千鳥前とも云う。浅利の浦の海士の子にして、其本名を知らず。時代も亦定かならねど、国司時代なるは明なり。伝え云う、郷相、洛より州に至り、見巡りたまひし時、漁夫の少女どもを召して、国ぶりの歌歌い舞わしめ、酒食など給わりけるが、中に年頃十六七ばかりなる少女の身につづれを着け、髪はつくるわねどそゞろに、みめ美しく、姿卑しからず、且つ声妙えに、手振りやさしく、下臈^{げろう}(下級女官)とも見えざりければ、感の余り、特に紫の衣一重給わりけるに、

紫の 雲の上衣も 何かせん かづきのみする あまの子なれば。

と申して返しければ、いとど感増りて、あわれに思召し、都へ具して上らんと、のたまわせけるを、父母に別れんことを悲みて、

もろともに あさりしものを浜千鳥 ひとり雲居に立ちやのぼらん、

と歎き申しければ、父母ともに具して上られけり。後に公達あまた出来けるとぞ

頌 曰 (本朝列女伝)

海畔処女配千貴人、假飾不久才徳無泯、螽斯揖々麟痕趾振々、嗚呼奇哉惟誰後身。

今浅利姫の塚とて、町の上なる篁の中に五輪ありて、俗にキサキ藪と云う。終は国にて遂しにや、後に一族共の築しものにや。(石見海底のいくり)

◆島田左近

名は正辰、字は龍章、其先は美濃国の人。正辰、烏丸家に仕へ、後九條尚忠に仕えたり。公武合体論者にして、井伊直弼の臣長野主膳と謀を合せて、公家を周旋し以て幕府の顛倒を救わんとし、和宮、幕府に降嫁したまうに於て力あり、供奉して江戸に到り、将軍に謁し、後左近衛権大尉に任ぜられしかば、人呼んで島田左近と言えり。一時公家に勢力ありしが、志士之を憎み、文久二年七月廿一日左近を暗殺して四廿条河原に梟(さらし首)せり。

◆佐々木梅日

地方にて聞けば青池湘雨等と伯仲の間にある俳人なりと言えど、独優れて世間に其名を知られ、大日本人名辞書・石見人物志にも特に此人を挙げたり。「霞まる、音のゆるみや山の水」の如き、俗をはなれたるものにあらずや。

俳人なり。石州浅利の人。梅日は其號、一に芳齋と號し、龜太郎と稱す。弘化頃こうかの人。(大日本人名辞書)

13. 黒 松 村

古の都治郷の内なり。黒島とは、黒松の黒と万松山楽音寺の松と合せて村名とせるなりとの説は、いかが。亦松と云う地は、播磨・因幡・豊後・肥後・羽前等多く、黒松と云うは未だ他に聞かざれど、黒檜山は下野に在り、黒森は、諸国に多し。又黒島・黒岩・黒木・黒坂・黒沢等あるをも合せ考えるに、黒松は土産植物によりて付けし名ならん。

黒松村是那賀郡の最東部に在り。東より来る者、西より往く者、本村に入りて、其景色よきに慰められて、疲れし足の軽くなるは、人々の実験する所。宮に大島神社あり、寺に万松山楽音寺あり、前には仁医上垣謙二あり、今は優良なる漁業組合あり。

◆黒松浦漁業組合

農商務省より優良と認められ、本県水産組合より表彰せられたり。

◆佳景

大崎岬は海中に付出せる断崖絶壁にして、切れ通しに依りて、海水通じ、陸地と離れて島の如く、架するに丸木橋を以てす。頂は松樹蔚(鬱)蒼として繁り、西南数十畳の岩上に坐して眺むれば、浅利富士は湾内の大島と相對して、風景田子の浦に似たり。黒島、平島亦風を添う。

大島は、村の最西部数町の海中にあり、周囲廿余町、島内に大島神社あり、市杵島姫命を祀れる村社なり。祭日には遠近の参詣者多し。

◆万松山楽音寺

黒島の洞窟中にあり楽師如来を本尊とせる真言宗なり。鮑の貝に乗りて出現まししと伝へ、十七年目に中開帳、三十三年目に大開帳あり、老幼男女相率ゐて参拝するのみならず、他出中の者も帰郷するを例とす。

◆上垣謙二

文政五年本村に生れ、幼より学を好み、壮時出でて広島・鳥取・京都に遊学し、漢学医学を修め、郷に歸りて眼科内科医を開業し、地方の名医と呼ばれたり。自ら持すること質素儉約なれど、施薬施米以て貧民を賑はすを樂とし、又夜間相互の業に妨なき時を選び、青年を我家に集めて、読書を授け、人道を説けり。明治廿七年七十三歳にて歿せり。

◆ならはま波来浜

都治村後地と本村との久しき間の論地なり。明治四年十月の浜田県の記には、「後地村と黒松村との論地、波来浜を奉還し、更に雨村に貸渡になる」とあり。白砂松相續きて風景愛すべし。

14. 都 治 村

古の都治郷の本場にして、国司時代には邇摩郡の内なりき。郷川以東の今の那賀郡に属する部は、渡津太

田を除きて全部都治にて、今の邇摩西部も此郷に属せしなり。都治の名は、津(港)の道にて、山路、川路、船路、陸路などの類なる津道なり。

杵道とかけるも、ツキチの訓を借れるにてツチなり。樟道沢も撞道の誤字にて、撞道またツキチの訓を借れるツチなり。高山寺本和名抄には正しく津道と書けり。

津治は、古き歴史を有せる地にして、旧家亦少からざれども、大同より延長頃迄の伝説記録は、深く信ずべきにあらず。仁和四年当郷戸数土農合せて六百八十余戸と云えるが如き、当時の郷制にも地方の実際にも合わぬいと後の世の追記なるのみ。されど、和氣氏のこと幾分か根拠あり。平田都治二氏の事に至りては旁証多し。

要するに、国司時代の末より歴史時代に入り、守護地頭時代、郡雄割據時代には、正確なる事実を伝う。古きは、措いて問わず、唯是のみにても、地方にて誇るべき地なり。近時果樹栽培盛なり。

(森文書の貴重なるは郡史郡雄割拠時代に記せり。)

◆和氣氏

天長中、和氣清磨の後裔、和氣伊予守清宗来れりと云うは如何。康平治暦の交、安部貞任の子清宗、伊予より来れりと云うが信ずべきものの如し。清宗の母は、伊予和氣氏なり。伊予和氣氏は、清磨の裔にあらずして、景行天皇の皇子の後なり。

◆平田氏

平田四郎嘉貞が、頼朝の時、地頭として来りしは、郡史に詳なり。五世平田三郎武家なりしに、其子屋彌四郎は、宮方に志ありて父と合わず、家を出でて京都に上り僧となりて俗姓をかたどり、平田茲均と云い、浜田に帰り寺を開きて住せしが、都治城福屋に攻めらるるに及び、都治に帰り、父を援けて城を保ちたり。父の死後宮方に属せしに、正平五年師泰の来侵にあいて落城し、城邑佐々木行連の有となりければ、再び浜田に行き、高田山玉林寺に居り、正平十九年九月十六日寂す。在家の時の子、父を慕いて、松原に行き、後裔木屋と称す。

◆都治氏

佐々木行連より九代二百四十年間都治に居り、都治を氏とす。七代三河守隆行は、稍名を知られたり。都治四代弘行が、土屋宗信に殺害せられし後、住む郷、都治は烏丸殿の支配となり、松波六郎左衛門代官として下向せりと伝う。

◆慈恩寺

南陽山と號す。足利直冬が住せし寺なり。直冬は尊氏の庶長子にして、父及び弟と行動を異にし、宮方となりて石見の官軍を率ゐしが、天援二年、力尽き世を絶ち、後遂に石見に卒せり。慈恩寺玉溪道昭居士と云う、細川幽齋、此寺に於て庭前の楓を見て

深山木の中に夏をやわか楓
と詠みしに、彼の九州道の記に書せり。

慈恩寺を尊氏が建てし安国寺と混同するは誤なり (打萩英一著武將終焉地)

◆三竹

姓は山本、名は教語、俳句の宗匠にして、兼て教育に功あり、其傳教育の部に詳なり。

◆青木サキ

今上天皇陛下御即位禮の大典に當り、百歳の高齡に依り、三つ重御杯を頂戴せり。

15. 下 松 山 村

上河戸・下河戸・八神・太田を合せて、明治廿二年命名せるものなり。松山村の下にあれば名とせるなるべし。古、太田は都濃郷に、其他は都治郷に属せり。大田が都農なるは、太田の大飯彦命神社が、式的那賀郡の部にあるに、都治郷は其時邇摩郡なるにて知るべし。

室神山は、人麿の歌に屋上乃山とありて、今其地域浅利なるが、古は八神に属せしものならん。式内大飯彦命神社あり。浄土宗浄天援二年寺あり。八重葎やえむぐらの著者、石田初右衛門あり。石見人名録の編者石田権右衛門あり。

◆石田初右衛門

名は春律、太田波積屋五代の主にして、江川堂澗水と號す。性国書を好み、石見八重葎及び農家必用書を著せり。八重葎は、石見の地名辞書にして、参考書を得ること難き時代なれば、独断に失せし所無きにあらずれど、世を益せしこと大なり。文政九丙戌七月七日死せり。年七十、法名は忠山良義居士。

初右衛門又山畠を開き甘藷を植ゑしめ、猪鹿の害を防ぐ法を案出せしかば、井戸平左衛門・青木秀誠・石田初右衛門を甘藷栽培の三恩人と称う。

◆石田権右衛門

初右衛門の子、父に似て学才あり。石見人名録を編纂し、石見国文人^{ハッカー}黒客の得意の作と、肖像略伝を載せ木版にて出版したり。其第二編を公にせしは天保二辛卯初秋なり。

16. 松 山 村

村内市村に、名高き古城址松山あれば名とす。「源頼朝が松山孫二郎入道及其子息五郎左衛門の功を論じて賞賜せし地」と云いて、暗に村名の起原の如く伝うるは誤なり。大日本史料によれば、二人共、吉野朝廷時代の人にして、河上かわのぼりの松山城とあれば、松山が山の名なること明なり。国司時代には、都治郷内なりしが、鎌倉幕府紀に別立し、河上かわのぼりと云いしものの如し。

河上かわのぼり松山城は、川上かわかみ・佐々木・福屋を送仰して、共に河上かわのぼり氏を称せしめ、餅屋治郎兵衛は、菅笠伝授之祖と云われ、清泰寺は、桜を以て有名なり。市村の牛蒡市亦名あり。其他上津井に林城址あり、松山の出城なりし櫃城址は長良にあり、足利直冬の拠城と伝へらるる高畑城址は畑田にありて都治村境に立てり。

◆河上氏

三つの異なる系統あり。

第一は、都野氏の同族なる川上(河上)氏にして、本姓は藤原、近江国中原氏より出で鎌倉幕府の末期、石見に來り、河上松山城に居り、吉野朝廷時代には、大に勤王せしが、五郎左衛門の時、賊高師泰に攻

め落とされたり。世を伝える三代。

第二は、都治と同族なる佐々木氏にして、同じく河上氏を称す。信濃より来れりと云えども、系統は信濃源氏にあらずして、近江源氏なり。武家方として来り、二百年許続きたり。

第三は、福屋一族の河上氏にして、本姓は藤原、割拠時代の末頃、福屋氏勢を張り、遂に佐々木姓河上に代りしなり。河上次郎の時、毛利に攻められて亡びたり。

◆万安山清泰寺

臨済宗東福寺派にして、開基は東福寺三世勅諭仏心大明国師と伝うれど、其弟子が開基して、師を勧請開山とせしものの如し。嘉元二甲辰(1164)川上しの創建なり。世々城主の尊信浅からざりしが、廢城以後稍衰えたり。境内の桜は、樹周丈余、高さ六丈に達し、其花の満開するや白雲のたなびくが如く、馥郁たる芳香八方に満ち、真に近郷の名木たり。十世松陰禪師休庵茂實と号し、学徳高く、廉潔奇行、西行一休の風ありきと云う。

花に寝て佛もわれも無かりけり

◆餅屋治郎兵衛

菅笠伝授之祖。大字市村の特産として、菅笠あり。各戸殆んど縫わざるなく、女子の内職として、随一なり。其由来を尋ぬるに、今より百七十年許前、延享年間、川登(市村)に餅屋治郎兵衛と云う者住みけるが、日本廻国大社参詣を思い立ち、途次加賀国金沢城下に到りしに、そこに菅笠製造所あり、「住民に比して耕地少き我郷里に伝えなば、内職として恰好ならん」と心付き、切に製法の伝授を乞い、悉く其秘伝を授かり、又菅苗十六株を得、昼は之を擔い、夜は水に浸し、辛苦を重ねて、漸く持帰り、植付けたるに生育よろしく、遂に今日の如く、菅も殖え、製造者も多くなれりとぞ。次郎兵衛、宝暦四年三月廿二日死せり。法名を釈永照信士と云う。里人其徳を忘れず、法光寺境内に報徳碑を建て、毎年笠祭とて之を祭る。

17. 川 平 村

川平村とは、南川上の川と、平田の平とを取合せて、村制実施の際名づけしなり。南川上を八重葎には南川登と書けど、寛文印知集に南川上とあれば、それに拠るをよしとす。平田は、古、平床と田原とを合せなりしを、明治八年平田とせるなり、又古の千金と田野とを合せたる金田の一部小字大野をも、川平村に組入れたり。国司時代には都農郷内なりしなり。

川平村は、都治跡市間の郡道の通ずる所、江津より邑智郡に通う改修道路の過ぎる所、又南川上は名の示す如く、対岸の市村(一名かわのぼり)と関係深き所なり。慶長年間大久保石見守の寺社領打渡書には、田原の天満宮南川上の光福寺あり。現今神社二・寺院四あり。

放光尊形報恩碑は、金色金正福寺に在り。又一の瀧・二の瀧・三の滝あり、高さ一丈乃至三丈、壯観見るべく、都会近傍にあらしめば杖を曳く者多からんに、惜おしいかな哉。近時木炭改良を計画せるが有望なり。

◆放光尊形報恩碑

往昔正福寺と云う真言の一字ありしが、永禄七年八月三日、天地俄かに晦冥にわ かいめい(真つ暗闇)し、雷電はめき、降雨盆を傾くるが如く、洪水岡河に溢ふる。此時高丸山より、卒然山瀬つき出で、峯忽ち崩れ、中山高丸の間を塞ぎ浸水は湖海の如くなれり。この大破に依り、堂舎人畜概ね埋没せられけるが、生き残りける者梅の木より光の現わるゝを見、尋ね行けば、彼の正福寺のにて於はしけり。人々奇異の思を爲し、世界破滅とも思いし程の中より免れて、昔に変わぬ御仏を拝むこそ不思議なれと、草庵を営みて安置せり。其後真宗の寺院となりしが、再興九世の住職順恵の代、天保二年辛卯春、碑を建て、其由を刻めり。

18. 跡あと市いち村

古、都農郷内なりしが、分れて都於郷となり、又阿刀莊を立てたり。跡市の跡は此阿刀の音を表わす為の字なり。されば或は阿登と書き、阿都市とも書けり。大名時代の末頃より跡市に一定せり。

群雄割拠時代、福屋の拠城乙分城は、阿登の音明城とも云いて、跡市を城下の市街とせり。大名時代、浜田領の代官所のありし所にして、代官を廃して割元を置きし時代にも、千田の近重・跡市の澤津等其

役を勤めし故、跡市組三十六ヶ村の中心は、尚今日の跡市村の外に出でざりき。されば宮寺も大かりしを或は他所に移り或は廃絶に帰せしもの少なからず。今尚隆盛なるは、八幡宮・曹洞宗慈光寺・真宗浄光寺等なり。「有福土産に千田の飴」と歌わる、千田飴は産額多からざれど古来有名なり。

◆近重歆太

近重氏は重富氏より出で、重富氏は菊池武房の子・重富與一武村を祖とす。福屋城陥落の際、近重氏の妻子千田^{のが}に遁れ、大野名を開きて之に住し、歆太は其十二世の孫なり。文学に長じ、其邸宅の一部を以て学舎にあて、近郷の少年を集めて、読・書・算の諸学科を授け、殊に農事に意を注ぎ、里人を誘導して山野を開墾し、溝渠を通して灌漑に便し、水害を防ぎ其他社寺の保存に注意する等公共事業に尽せること少からず。又三十六ヶ村割元役兼庄屋を勤め、治積大に見るべきものあり。時の藩主より特に独座礼庄屋上席を許され、数度の褒賞に預れり。

◆澤津満知女^{まち}

澤津次郎左衛門の妻なり。其家は門閥高く、浜田領内第一の資産家なるに、常に綿服を着、一杖によりて神社仏閣名所旧跡を廻るを楽とせり。性慈善を好み、深く仏法を信じ、聖武天皇の御願に成れる国分寺の荒廢せるを嘆き其復興に與りて力あり。寺前の納経塔は、満知女の発願にて、其子忠右衛門等の完成せるものなり。

さしあけて不二の蔭ゆく扇子かな

澤津氏母澤津

◆田中如山

本姓は兒島、名は幸綱、丹波篠山藩の郷土の子なるが、入りて跡市村医師田中氏を継ぐ。養父蘭学を修め、斬新なる治療をなし、世人を驚かし、事^{しば}々なりき。如山亦学深く、殊に本草に長じ、劍術柔道に秀で詩歌にも趣味を有し、鳥取勤王二十士^{のが}の遁れて和木に来るや、如山風流に託して、跡市に招き、遂に^{ふんけい}勿颯の交をなせり。

◆蛇山瀧

跡市の市街を距る東方廿六町、郡道に沿いて賀志岐河の上流に在り。一條の白練巖角にほとばしり、ふち奔流潭底を撲ちて、其響雷の如し。飛沫は、散りて玉となり、碎けて花と化し、或は反照に映じて、虹霓を吐く。夫の春花秋葉、綾羅錦繡りょうら きんしゅうの粧を水面に醮すの辺、細鱗潑漉石に触れて躍るが若きに至っては、其の佳景一にして尽きず、豈唯三伏暑を洗うの境のみならんや。

19. あり 有 ふく 福 村

有福伴三實長、徳治元丙午(1966)年八幡宮造営とあり。これ有福の名の古書に見えたる初めにして、其正史に見えしは、大日本史料興国二年福屋城攻の時ふく有福五分一地頭越生七郎光氏を初めとす。寛永の頃より便利上、上有福・下有福と云いける由なれど寛文に至りても、印知集に有福村とあれば、上下と云うは俗称なりしが如し。公に称うるに至りしは今より百八十年前元文年間よりとなす。(天文年間より上下に別れたりと云うは誤) 明治廿二年本明・上有福・下有福・大金・宇野を合併して、有福村と改称せり。大金は、大名時代おおい大津姉金なりしを、明治八年大金とせしものなり。

有福は其名の如く天与の福を有せり。温泉湧き出でて昼夜を分たず、湯量多く浴客繁し、福屋城山は本明に在り、山上金毘羅神社ありて参拝者多し。上有福八幡宮の神木と称するいちょう大公孫樹は、周囲六間、直径二間中国の名木なり。其近傍の福泉寺は、温泉と関係深し。其他大金に菊石あり。宇野に宇野大根・孝子八郎左衛門之墓あり。下有福に妙好人善太郎之碑あり。浴後散策すべき所少からず。

◆有福温泉

温泉の起原に就ては、斉明天皇白雉年中、天竺の法道仙人舞来、有福温泉此時より湧出云々の説あれど、其最も信ずべき起原は、靈湯山福泉寺の建立なる建武年間(今より五百八十年前)とす、此の以前温泉なかりしとは断言すべからざれど、以後寺院は慈善的に、無賃にて諸人をして宿泊せしめ、器具を貸しなどして、浴客大に便利を得たりと見ゆ。

元和中(殆んど三百年前)より盛に湧出し、諸病に効あること諸方に知れ、来り浴する者益多く、次の年々寛永年中には、福泉寺を再興せしが、漸次遊山保養の浴客も多くなり、湯谷は俗界となりたる上、慶安中、山さえ崩れたれば、福泉寺は湯谷より有福の郷に移転せり。是より湯谷に宿屋も建てらるゝに至れりと云う。

宝暦中(今より百五十年前)温泉は、湯元(河野氏)の管理経営する所となり、此時より全然営利的に変せりと云う。されど今日にても、入浴費用の多く入らざるは、人々の驚く所なり。

其後三十年許寛政八丙辰年十一月、頼山陽来遊せるあり。爾来文人墨客の杖を曳く者少からず、爲に声価四方に聞ゆ、村営となりしは、明治廿二年なり。而して村制実施に際し、村長佐々木吉太郎等同村の将来を慮り、多少の反対ありしにも關らず、村債を興して買入れたり。

◆孝子八郎左衛門

姓は河野、宇野の人なり。至孝正直にして、親族に篤く、近隣に親しく、よく上を敬い、納税諸役を怠らず、常に法令を遵守し、又人の語るを樂む。毎年稲の初穂をば、必ず神仏に供へ、又上納中に入るゝを法とす。就中其孝行に至りては、万人の感ずる所、明和七年九月四日浜田侯之を賞し、白銀酒肴を賜い、田地を下賜せり。天明八戌申年十月十八日七十七歳にて死せり。

◆福泉寺

温泉湧出する辺、一小仏堂ありしを、建武年中修めて巖たる一寺院となし、直山侃和尚を請いて開山とせり。即ち靈湯山福泉寺の開基なり。其後衰えければ、寛永中蘭叔禅衲中興し、慶安中山崩れに遭遇して、有福の郷に移れり。是今の福泉寺なり。

石邑雲深正厭喧、靈湯聞説洗塵昏、我宗房宇宜鎮護、瑞像曜威今尚尊。

昆城是鑛たのみなば、生死の海は深くとも、弘誓の船に乗は遅れじ。(札所詠歌)

村内大字追原字美又みまたに温泉場ありて、美又の名高ければ、明治廿二年四月、追原・入野・今福合併の際、村名とせるなり。美又の元は水股みまたにてもあらんか、吉野朝廷時代芸兵福屋攻の時の文書に、三和田川みわたの語あり。今の美又川なるべく思わる。又追原は益田家の鎌倉時代文書にある大井原なるべきか。

本村は、津和野領なりし関係もあらん。水質の関係もあらん。古来製紙盛にして、畑年貢は紙納の定なりし故、今日たとい金納米納にする者ありとも、取定めは紙何束と云うを常とす。是他村にて多く見聞せざる所なり。美又温泉場は、湯治を主とし、閑静を欲する者の好んで来る所。郵便局と郷社八幡宮とは今福に在り。

◆美又温泉

花崗岩の裂罅れっかより湧出し、温度は摂氏三十六度九分なれば、夏季を除くの外入浴に不可なると、且つ近傍に有福温泉のあることに依り、盛ならざりしが、其湯治効能大にして、殊に皮膚病、リウマチ、子宮病、疝気等に殊効あるに依り、漸次入浴客殖えたれば、今は時節に依り適当に温度を左右する人工方法を採用し、四時入浴し得るに至らしめて、益々隆盛に赴けり。(分析表主治効能は第一編詳なり。)

21. 木 田 村

木田村は嘉字を選びて、喜多村と書きしこともあれど、心は北村●なりと云う。是本村と和田村との間に、在る防六山より、今も小き水晶を産すれど、古は宝銀山と云いて、大なる玉出でたれば、此辺を玉枝の郷と云い、其本郷が今の和田本郷にて、本村は北部にあれば北村と名づけたりと云う。和名抄條撰以後の事なるべく、抄には矢戸川筋を桜井郷とし、玉枝郷無し。

緑樹鬱蒼たる浜松山には、郷社八幡宮あり。正蓮寺には、和田の豊原たくみ工匠の彫刻にかかる名高き門あり。又此村に郡内第一の資産家佐々田あり。半紙は大名時代時代より本村の産物にして今尚盛に製造す。

◆佐々田

久佐の政所まどころの分家なり。当主懋は廿五歳にして県会議員となり、国会開設に及び衆議院議員に選挙され、

現今貴族院議員たり。明治十四年三月、石見産紙会社社長に挙げられ、紙質改良荷造等の方法を研究せんがため農商務省に出頭して、親しく其利害を明にし、帰りて製紙工場を設けて改良製紙法を伝習し、又近村に三楯苗を分与して、益々製紙を奨励せり。

22. 和田村

和田、重富、本郷を合せて、村制実施の際名付けしなり。本郷は寛文印知集にも、唯本郷とのみ書き、津和野藩の書類にも、常に本郷とのみあり。古の玉枝本郷なりと云う。されど一般に本郷とのみ云い、他の本郷と区別するために、和野本郷と云いしことあれど公称にはあらず。

古、本村の大部は、福屋氏の領地にて、和田の八幡宮は、福屋兼廣の建立にかかる。重富は、割拠時代、勇猛なる重富党の拠城ありし地にて、有名なり。昔は天才彫刻家和田のたくみ工匠、教育卓見家湯浅見省、及び芳川紙を有し、今は河西、久保田、豊原等の造林と果樹とに依りて名有り。

◆八幡宮

和田七谷山に在り。寛元々年、福屋氏の祖、兼廣の勸請せしものにて、現今村社なれど、神職の外、神宮寺ありて奉仕せしを見ても、其盛大なりしは察せらる。神宮寺は、維新後海應法印復飾して廢寺となれり。

◆重富氏

重富には重富兼雄の城跡あり。兼雄夫婦の目覚しき働き振は陰徳太平記其他多くの書に記載せられたれば、述べず。抑々重富氏は、肥後菊池氏より出でて、原、長瀬と同族なり。原氏の名は、既に鎌倉時代郡史に出で、長瀬氏は、吉野朝廷時代に、重富氏は、群雄割拠時代に其名を著けだ (もしかすると)わせり。盖し、菊池一族の本郡に來りしは、弘安役の恩賞によりてならん。

23. 都川村

明治廿二年都川・来尾を合せて、都川村名づけたり。寛文印知集に来尾村なければ、来尾は其後分村なる

べし。されば合併は復古とも云うべし。都川の名は、古、都人來りて、開拓せしに、京都加茂川のさまに似たりとて、都川と名づけたりと云うは、如何かと思わる。

三石山は、大名時代三領の境に立てり。赤谷は昔時難道と呼ぶる。熊ヶ谷久左衛門は、備荒貯蓄家なり。現今広島往来の県道通じ、製材所あり。山葵は地味に適して有望なり。

◆三石山

那賀・邑智・広島県山県三郡の境に在り。絶頂に方二尺の石ありて、三つに裂開せり。昔、津和野・浜田・広島三藩より立会の上、建設せしものにて、一部は津和野領に・一部は浜田領に・一部は芸州領に属したりき。津和野藩主は実地臨検せしことありと云う。

◆久左衛門

都川熊ヶ谷久左衛門は、常にぜんまい 薇・りようぼ 令法・麦・粟・ぬか 稗の糠など、いやしく 苟も人畜の食に充てらるゝものにて、久しきに耐うる物は、何によらず貯え置きて、天保七丙申の大飢饉に、餓死の難を免れたり。其伴を彌右衛門と云う。(神村道塩當座)

◆旧跡

本村開拓者の住みしと云う岩窟、其墓なりとて川石を高二尺径一間許に積みたる塚二箇は研究の価値あり。城山・土居屋敷・京徳原・花田と云う字・砂田の五輪塔其他多くの地名は参考に供すべし。最初の開拓者にはあらざるべきも、今より四百六十余年前享徳享徳年間楠氏の遺裔花田某の來りしと云うは、信ずべきが如し。

24. いま 今 いち 市 村

福屋城下たりし時は、今の古市が市街地なりしに、落城後、現今の所に人家移りし故、今市と名づけたり。明治廿二年丸原坂本を合せたる際、尚今市の称を襲えり。坂本は大名時代、鼠原八木なりしを、維新後合併し、村社が近江国坂本より勧請せるなりと云うそれと中国大山脈の坂下あるこれとに依り坂本と名付けしな

り。丸原と云うは地勢によるか。此地が福屋氏の居住地なりしことは、今市を貫流する川を福谷川ふくやがわと云うと、今市に三家本氏みかもとあるとによりて証明せらる。今市の東南に聳ゆる家古屋そびは、其城址にして、丸原の雲井山は、其家来の拠城なりと伝う。(乙分おとわけに城せしは、蒙古防備の時なるべし) 大名時代の末、国学者高子常磐たかすあり。今造林の模範とすべき県有部分林あり。

◆高子常磐

一名を大士ますをと云う。国学者にして地方上流社会の教育をな為せり。文学博士松本愛重・生国魂神社宮司野田菅麿の如きも、其門下生なりきと云う。

◆丸原県有部分林

杉ヒノキ廿二万五千九百三十本を五十町歩に植付け現に美林をなせり。

◆春日神社

福屋の本宗藤原氏の氏神にして、もと日向山に在りしを、神社整理の結果、郷社八幡宮境内社とせり。今より約百三十年前、寛政元年小林藤兵衛と云う者、春日神社境内より、石燈籠を掘出せしに、弘和二年とありき。弘和は吉野朝廷年々にして、天授二年以後なるに、尚正朔を奉せしは、其志の有りし所を察すべし。

25. 久 佐 村

久佐は、国司時代より既に郷名に在せり。大名時代長屋・久佐・柚根に分村し居りしを、明治廿二年復合せて久佐村とせり。

国司時代よりの旧郷にして、吉野朝廷時代には金木城あり、大名時代には、津和野藩より、此地に代官所を置き、久佐組・日貫・長安組を管轄せり。宮には八幡宮、寺には隆興寺・浄光寺あり、医師三谷見龍・文士島村抱月は、本村出身なり。近時盛に椎茸を作る。

◆古城址

金木城址は本村と雲城村と波佐村との境に在り、雲城方面には金木谷と云う地名在す。吉野朝勤王軍の抛城にして、大内に攻められし所なり。又本村にて大谷山と云うは、山頂上城・下城の二に分かれて鞍馬の如く、上城にては、今尚石垣の残れるあり、八九合目に馬場の跡あり、本村と今市村の丸原と今市との境に在り、古の両子山は、今市の家古屋山なりと普通に云えど、山の姿より云う時は、此大谷山ならずやと思わる。

◆八幡宮

常磐山にあり。勸請年月詳ならざれど、郷の旧きより推す時は、社も旧かるべしと察せらる。応永十八年七月廿五日、芸州大守沙彌悦菟再興せり。此は忠臣福屋兼景の孫福屋安芸守兼光が、曾孫、安芸守氏兼の法名なるべし。

◆隆興寺

臨時宗。正保中・尼子倫久・尼子善兵衛宗久の開基にして石天大和尚を中興開山とすと伝う。倫久は長州阿武郡紫福にて、元和九年に卒去したれば、当地に來り居らざるは明なり。倫久の兄義久嗣なく、倫久の男九一郎を養て子となす。九一郎家を督ぎ、久佐将監元知と称すと毛利家の記録に存す。宗久は其族なるべし。又正保中開基にあらずして正保以前の開基ならん。その中興大和尚が、正保四丁亥年八月廿八日遷化せしと、隆興寺と云う寺の名によりて推知すべし。正保に開基し、正保に中興して、正保四年に中興和尚が寂せりとは、其間あまり相近きにあらずや。又隆興とは、菩提を弔い、冥福を祈る外に、現世利益の意味を含まずや。即尼子家の復興を祈念するものと思わるべし。以上三点より、当寺の開基は尼子宗久と云う者にて、永禄九年以後げん ねん ぶ元和偃武こうえい以前、四五十年の間にあるべしと推定す。宗久の後裔家名を政所まんどころと云い、佐々田を氏とす。

※元和1年大坂の陣が終り豊臣氏滅亡後平和な時代になった。偃武武器を伏せ用いないこと。

26. 伊 南 村

後野・宇津井・佐野を合せて、自治村を為す時、伊南村と名つけたり。其地域の大部分が、古の伊甘郷の南部ならばなり。後野・宇津井は旧浜田領、佐野は津和野領なりき。

神社には、伊南神社・八幡宮あり。寺院には、慈雲寺・良昌寺あり。人物には、岡本與三左衛門、河上仁

右衛門あり、宇津井炭・後野竹昔より名あり。浜田町に向って、薪炭野菜の供給をなす。

◆岡本與三左衛門

其先は大中臣より出で、天慶乱の時、小野好古の命に依りて石見に下れりと伝う。鎌倉幕府紀小石見郷士に岡本某あり。室町幕府紀には三宮の神職岡本氏、土豪を以て顕われ、割拠時代となるや、三宮三子山城主として、石見豪族に数えられたり與三左衛門は、此と同族にして今福に居りし者、毛利に仕えて戦功あり。後野大迫兩名を給せられ、移りて後野に住めり。殊に吉川氏の寵(愛)を受け、二男千鶴を、元春の男元氏より、孫太郎と改名せしめられし程なりしが、^{ぎょうがん}炯眼なる與三左衛門は大勢を達観して断然剣を投じて農に帰し、開拓を事とし、以て子孫永遠の策を建てたり。^{こうえい}後裔俊信、現に吉川氏よりの文書、其他古器物を保存せり。

◆河上仁右衛門

父は與惣左衛門、其先は近江より川筋(郷川沿岸)に來り、後上府に住し、割拠時代の末、宇津井に移れりと云う。仁右衛門は、大名時代の初めの人にして、氣宇闊達膽斗の如く、会て猿猴と格闘して之をして降参せしめ、宇津井の川にては、永久人を取らざるを誓わしめしと云う伝説の如き、其人物を察すべき好材料ならずや。又質実剛健の性を有し、荊棘を排し、荒蕉を拓き、地を掘り土を盛り、多年風雨をものともせず、自ら瘦馬を牽きて数町の外より肥土を運び、遂に中原名田地を作れり。正保寛文年間の人にして庄屋役をも勤めたり。

◆後野竹林

字石神に在り、段別四町四段余、^{ろうかん}琅玕の玉簾美しく其名聞ゆ。

おひしげる	竹の林は	動きなき	名も石神の	千代栄ゆらん	福	羽	美	静
石神の	神代のまに	伸び来つ、	そのたけ高く	朽ちずくだけず	小	杉	楯	邨
	心むなしき	ものなれば	嬉しき節も	まさるなり				
	千代も操を	かへざれば	雲居に高く	伸びぬなり	同			人
真直なる	竹は雲井に	とどくまで	いや高々に	のび茂るらむ	賀	屋	鎌	子

27. 雲^{くも}城^ぎ村

本村と三階村長見との境に、雲来山あり、雲城山とも書く。されば明治廿二年、上来原・下来原・七條を合せて一村となしたる際、取って以て名とせるなり。寛文印知集津和野領に来原あり、未だ上下に分れず。浜田領に七條・伊木あり。八重葎には小笹あり。明治維新後、七條・伊木・小笹を合せて、七條とせり。

「国造時代に、天皇巡狩し給いて、此処に都を定めんとし給いしに、七條迄はあれど、九條となすには二條足らざれば都とならざりき」と云う説の誤なるは、当時九條の制度あらざるによりて分明なり。「後醍醐天皇伯耆にて賊徒に迫られ、既に危く見え給いしかば、足利直冬、三隅、澤等相謀り、小笠原某、玉体を負い奉りて七條につれ還り云々」の説も、誤なり。

直冬は当時関東にありて、京都にも上り居らず、況んや石見に來りしは、約廿年も後の事なるに於てをや。唯大覚寺派の皇胤の、難を避けて万寿寺に居たまいきと云うは、研究の価値あり。前二説は、畢竟、これを誤り伝えたるものにあらずや。

此村には、二人の公共事業に尽力せし人有り。一は半田太郎兵衛にして、一は岡本甚左衛門なり。下来原には郷社八幡宮あり。

◆半田太郎兵衛

名は義正、七條に生る。天性仁慈、博く衆を愛し、公共事業に尽すを以て、己が任となし、辛苦経営して、平石の地に水道を開き、水を引きし人。慶安元戊子(2308)年十月廿八日死せり。法名正水院安山忠徳居士。

◆岡本甚左衛門

名は祐次、安永三甲午(2434)年七月十日七條に生る。三宮・後野の岡本と同宗にして七條・伊木・小笹の庄屋役を勤む。文政二年十二月、七條原新開の許可を受け、翌三年七月開拓を始め、其翌四年同地に転居し、天保五年九月十五日の歳月を費して、遂に奏功す。其苦心惨憺の跡、「舊藩美蹟」に詳なり。有名なる広草田大堤(周囲約一里)を築始めしは、天保五年なり。彼の創業的奇才と、用意周到なる計画と、不撓不屈の精神とは、賢明なる藩主松平周防守康任・大胆なる家老岡田頼母の認むる所となりて、竹島(蔚陵島)探検隊の一

人に選ばれしかど、発するに臨み病作りて、一行に加わらざりきと云う。天保十三年六月廿一日六十九歳を以て終る。法名を開原院慈眼浄徳居士と云い、安政五年大岡神社として祀らる。

28. 波佐村

波佐は、端狭間はざまの意なりとの説あり。大山脈の間にあれば、よく合えるに似たり。されど隣村久佐は、如何に解釈すべき。大字小国は、大名時代小国・徳田・柚根なりしを、維新後小国と改称せしなり。

中国山脈中の一峯雲月山は、此村の東南隅そびに聳え、周布川は此村より流れ出づ。古城址は波佐・柚根にもあれど、さしたる物ならず。唯金木城址は、吉野朝廷紀より既に名あり。神社は、常磐山に八幡宮あり、寺院は曹洞宗、永昌寺の外は皆真宗なり。三浦繁女の能書・澄川貞泉の狂歌は人のよく知る所。勝示山の杉林・近年開きたる放牧場は、衆望を負えり。

◆三浦繁女

又補子と云い、寛楽亭遊録とす。家名を竹岡と云い、井野村野地三浦の分家にして、始祖要助は本村の庄屋となり、遊惰を戒め、耕作を勧め、水利を治め、採鑛煉鐵製紙の業を興し、鋭意民業を奨励して、夙夜怠らざりしかば村政大に革り、恩威並び行われきと云う。彌三兼良其余応を承く。藩庁託するに、代官心添しゃくやを以てし、徳望日に益々高し。補子は実に彌三の妻なり。和歌管絃に堪能に、殊に能書の誉あり。嘗て京都かつに公卿其能書を聞き、招きて歌会を催し、席上色紙短冊を交換せりと云う。徳大寺卿等の短冊、今なお家に臧せり。常磐山に登り、八幡宮に奉納せし歌、次の如し。

としもあれ 神の御室に かけまくも うつすはあやな 水茎のあと
きぎの色も 変らぬ秋の 常磐山 いや栄えなん 神のまにまに
はふり子の かざす榊の 色はえて 猶すずしめの 声ぞありける (下句文字不明)
やはらぐる 光もここに 玉垣の 恵の露の うるふ民草

ます鏡 曇らぬ御代を 守りまして さも動かじな 国つ御社
天明七年丁未長月甲申(百三十年前なり)

三浦氏志希女 敬白

◆溶々庵貞泉

姓は澄川、名は益安、医を業とせり。貞玉を師として狂歌を学び、柳門四世の宗匠となり、石西其他諸国に門人多かりき。次にその参宮道中の狂歌の二三を示さん。如何に彼の奇警なるかを知るべし。

赤穂。 いろは武士の 昔をしのぶ赤穂の浦 四十七字のかなしかりけり

尼ヶ崎。 あたまから まるく治まる尼ヶ崎 いふこともなき所なりけり

衣笠山。 薄ものの 衣笠山の夏げしき けふきて見ればいとも涼しき

春日山。 燧やき。 買食すれど春日山 是はと人の ひはうたぬなり

伏見。 手をつけて 店に伏見の土細工 忽のぐで ばかす狐人形

海陸の恙なうして文月のついたちかへる我庵の内。 天保辰のふみ月 貞泉しるす

29. 高^{たか}城^ぎ村

村内小坂の千穂山に古城址あり、吉野朝廷時代の^{たかき}高木城の跡にて、^{たかぎ}高城とも書けば、明治廿二年、小坂・門田・高内・栃木を合せたる際、高城村と名つけたるなり。栃木は旧益田領にて、其他は津和野領なりき。寛文印知集には、小坂・栃木あり、八重葎には栃木・小坂・日高あり。門田・西河内は其後長安より分村せしもの。日高もこれより前寛文・文化の間に長安より分村せしなり。高内とは、廃藩置県の後、日高の高と西河内の内とを合せて、名つけたるものなり。

宮は栃木に八幡宮・小坂に大歳神社あり。寺は小坂の瑠璃寺最も名高く、門田の浄本寺と栃木の弘誓寺とは真宗なり。^{きど}城戸谷の風景は、耶馬溪・断魚溪に類す。そのおまん淵の由来亦耳を傾くべし。

◆寶珠山瑠璃寺

曹洞宗永平寺末にして、元禄享保の頃定めたる石州札所三十三番の中に在り。

彼の岸にさして倒らん 法の舟 玉の光の 添ふにまかせて (御詠歌)

◆高城城址

城主を田村修理亮と云い、大宝年間の人なりと伝う。大宝の修理亮は、京官にして地方官にあらず。官名の乱用せられ、或は名の体となりしは、吉野朝廷以後室町幕府・割拠時代の事に属す。萩藩閥閥録周布吉兵衛文書の正平三四年の條に高城城の記あり。「田村四郎盛泰は、兼定の弟なる兼政に四代の孫也」とあり。兼政の子高城城を築きたりとすとも、弘安役後ならざるべからず。之を官制より云うも之を系統より云うも、大宝説は誤なり。近傍に、陣ヶ原・出合い・矢矧等の字あり、古き墳墓あり。

◆城戸谷の絶景

周布川の上流沿岸には、風景の愛すべき地少からざれども、殊に賞すべきは、高城村城戸谷とす。就中天狗嶽は、奇巖重疊を以て著われ、上天狗は、瀑布を以て著わる、直下五丈銀龍天より降るが如し。樋瀧は長さ三十間余の樋の形をなして、平坦な地を狭く深く穿ちて流る、樋中深さ量り難し。此等の諸景、首尾殆ど相接し、送迎に違なく、壯観名状すべからず。

30. 長 安 村

明治廿二年四月、長安本郷・三里・程原・大坪・稻代を合せて長安村と称せり。これ皆古長安より分村せしものなればなり。其中三里は、明治八年小角・横谷・笹目原の三箇の里を合一して名つけたるなり。寛文印知集には、唯長安ありて其他は無く、今高城村に属せる門田。日高・西河内も無かりき。寛文四年(2324)以後、文化以前に分村せしは日高にして、大坪は文化以後の分村なり。其他門田・西河内・小角・横谷・笹目原・程原・稻代等の独立せしは、最近の事なり。此等、村制実施に際し、殆ど皆復古して長安村を成せり。

鎌倉幕府紀に三隅左衛門尉兼信の二男兼祐が、永安地頭となりて来りしより、吉野朝廷紀、室町幕府紀を経て、郡雄割拠時代の末期近き天文廿三年、永安大和守の益田行迄、永安氏は地方の門閥家にして、永安の

地は、地方の中心たりしなり。是ぞ後の長安村なる永安氏の掘城趾は、矢懸城山に在り。其鎮守八幡宮は、永嶽山に在り。寺には、曹洞宗興勝寺・真宗勝龍寺・浄願寺あり。勝龍寺の住職紀懿恭は、神職岡本重幸・庄屋岡本重徳と共に、本村発達に力を尽しし人なり。山葵わさびは、古より自然の物ありしが、近来栽培漸く盛なり。

◆八幡宮

永安本郷の中央に永嶽山あり。山勢正しく頂上に三反余歩の平地ありて、郷社八幡宮鎮座せり。享徳元年三月、宇佐より勧請せるものなり。石階百余級(段)、古松老杉おうい蔭蔚(=鬱葱)として天に参し、参拝者をして、そぞろに、敬虔けいけん(敬い慎む)の念を起さしむ。

◆勝龍寺

法性山と號す。天正九年紀善西開基せり。十一世紀懿恭は、文化二年の生にして、少壮学を好み、普門律師に隨いて曆数を学び、岡部氏に就きて国学を修め、余技として画をもてあそ弄び、人をして感賞せしむ。性剛毅直諒。寿八十一にして寂せり。次に其吟詠の一二を掲げん。

旅宿擣衣。 信濃路や 遠くも木曾の麻衣 誰更科の月に打らん
旅宿菊。 草枕 假のやどりと おもへども 心ぞとまる 白菊の花
木 枯。 拂ふべき 木の葉も 今は 無きものを 何木がらしの 空に吹らん

31. 杵き 東つか 村

明治廿二年、木都賀・野坂・川野原を合せ、国司時代の郷名杵東を取りて、村名とせり。大名時代には、野坂・西ノ郷・木都賀・熊野山ありて、浜田領に属し、田野原は、津和野領なりき。其中西ノ郷は、木都賀の枝郷、熊野山は、上古和の分村なるを、維新後木都賀に合せたるなり。田野原・熊野山供、古き文書には、田原・熊山と書きて、ノの字を入れて読ませたり。

国司時代那賀郡に八郷あり。其中六郷は、海辺河岸、人間生活に便なる地に在り。唯、杵東・久佐の二郷

のみ、海を離れたる地に存するは、何故なるか。しかも、井野・長安より前に、杵束の開けたるは、何に因るか。茲に地方人士の研究を促し、故きを温ねて新しきを知る料とせん。吉野朝廷時代の文書には、木束城ありて官軍に属せり。されど杵束の字、最も古く用いられたれば、今日杵束を村名とするは、當を得たりと云わん。かかる古き郷なるに似ず、名所旧蹟の著明なるもの無きは如何なるか。これ吉野朝廷に勤王せしたため、永安・吉川・益田等に蹂躪せられて湮滅せしによるなるべし。近時、耕地整理を為し、椎茸栽培場を開き、将に新しき活動に入らんとせり。

◆神社

郷社八幡宮は、木都賀字郷に在り。村社八幡宮は、野坂に在り、野坂八幡宮除地、二石と、大久保石見守の打渡書の中にあれば、古き社なるべし。村社槇尾神社は、田野原に在り。

◆仏閣

平等寺は、曹洞宗なり。もと平等庵と云い、久盛壽山一峯大居士の開きしものなるを、前越中大守平等院殿足翁道満大居士藤原清兼と云う者、平等寺となせり。清兼は永禄二年七月十九日卒す。浄久寺は、もと浄円寺と称して真言宗なりしを、天正八年三好円通真宗に改め、浄久寺と称したりと云う。

32. 黒 澤 村

黒澤・上古和・下古和と、河内の一部と合せて、黒澤村と称す。黒沢の名は、吉野朝廷紀の古文書に見えて郡史に載せられたり。上古和・下古和は、古和と云いし由、さもあるべし。されど大名時代の初め頃、既に上下に分かれたり。河内の大部は西隅村に入れり。

興国四年八月七日、賊党吉河経明・松田雅樂助等を潰走せしめて、黒澤城の名は著われたり。黒澤城は、木原城の事なるべし。又的野に鷹泊城あり。共に三浦氏の據城と傳う。宮は、黒澤に三島神社・下古和に大歳神社あり。寺は、曹洞宗如意院・真宗安養寺・光善寺あり。小野半兵衛は水利を通ずして名あり。猿猴碑の伝説亦面白し。製紙業盛にして、年産額一萬円に下ることなく、專業工場一箇所、其他百三十ご戸の兼業製紙家を有せり。

◆小野半兵衛

今を去る凡そ二百六十年前、^{およ}下古和字田屋ノ原と称する不毛地八町を開きて田地となし、又水利を起こして村益を増進せり。依て寛文五年十一月十五日、藩吏高橋瀬左衛門外三名の連署を以て、五石前の御免地を下付せられたり。



下古和字ヲバガフトコロの傍に、二尺許の石に、ハナサと云うに似たる、絵とも字とも判じ難きものを刻めるあり。これ昔猿猴の、此の石の文字消えざる間は、此の川にて人を取るまじと誓いしるしにて、猿猴は夜々其文字消さんとして、却て深からしめきと云う。何ぞ其の譚の無邪氣にして趣味津々たるや。

33. 西 隅 村

河内の大部と矢原・向野田と合して、明治廿二年自治村となりし際、三隅の西なれば、西三隅の意にて、西隅と命名せりと云う。郡の西隅の意なりとの説は、岡見にこそ当れ、本村には、^{やや}稍不当ならずや。国司時代は無論、鎌倉幕府紀に入りても、尚三隅郷内なりしは、記主禪師の傳に、三隅と書けるにて明なり。向野田は、寛文頃向田、文化頃向之田と書き、向野田と書くは後のことなり。

鎌倉幕府紀には、名僧記主禪師を出し、吉野朝廷紀には、矢原城ありて、三隅城と共に王事に勤め、大名時代には、寺井與右衛門ありて、大堰を造り、水利を起せり。向野田の天満宮は、慶長の社領打渡書にあり。寺は、惠日山良忠寺・青龍山極楽寺等数多し。矢原石木戸瀧は、瀑布に富める石見にても、他に多くあらざる壯観なり。

◆記主禪師

初めの名は良忠、然阿上人と云う。記主禪師は、伏見天皇の勅諡々なり。俗姓は藤原、正治元年七月廿九日三隅(現今の西隅村大字向野田字杉の森)に生れ、十一歳にして既に道心を発し、十三歳にして出雲鱒淵寺に学び、十六歳遂に祝髮受戒せり。これより一層勤行怠らず、貞永元年石見に帰り、多陀寺に修行す。時に浄土宗二世聖光上人筑後にあり、嘉頓二年九月八日良忠年三十八、往いて之に師事せしが、素より睿哲、自

づと事理に洞徹して師授を勞せず。次の年八月に至り浄土の法門余蘊なし。かくて故郷に帰り、芸州に移り、洛陽に遊び、関東に向い、遂に鎌倉光明寺を開きて居る。建治二年九月再び入洛し、居ること十一年、後嵯峨院・後深草院、院中に於て円頓大戒を受け、紫衣寶器を賜えり。

弘安九年鎌倉に帰り、十年七月六日西向端座し名号を称へつゝ、入寂せり、年八十九。是則ち浄土宗第三世の祖なり。(大日本人名辞書に、年八十五とあるは八十九の誤植なり。)

◆開拓者

開拓水利の恩人二人あり。木田千代太郎・寺井與右衛門是なり。木田は源平争衡時代の人なりと云えど、年代不詳と云う方当るべし。開拓の恩人なることは、明治の初年迄字森下に大元神として祀られしが、後村社に合祀せられしにて知るべし。寺井與右衛門は、延實五年三隅川の川口を修理して、舟楫の便を謀りしと云う大事業者なり。河内の庄屋を勤め、延寶八庚中年、黒澤河内界の荒瀬山下に、三年を費して大堰を設け、右は四十余町を距れる乙原に通う水道を掘り、左は一里の上河内に水を引くに至れり。工事の監督に当りて力ありしは、松坂茂右衛門なりと云う。又向ノ田庄屋平八と謀り、三隅川の水を引きて向ノ田及日ノ原の灌漑に便せんとせし計画は、水準を誤りて不成功に終れりと云う。元禄六酉年十一月死せり。村民其徳を慕い、夫婦之碑を建てたり。櫻田終焉居士・常在慈光大姉の名は永く後世に伝わらん。

34. 岡 見 村

岡見は古来一村にして大字なし。国司時代に遡らば一部なりしならん。吉野朝廷紀の吉川文書に、益田庄内すつとあれば、岡見を美濃郡に擬^{まが}する者あれど、庄は大小断続種々にて、大は島津庄の如く、一箇国以上なるあり。小は一郷に足らぬあり。或は隔れるありて庄を以て郡郷の境界は定めがたし。唯須津が一時武家方の領地なりしことを知り得べきのみ。

大島は、日本海航行帆船の救世主なりしに、今や須津築港成りて、一層便宜を与うるに至れり^{ただ(普通)}。啻に村内漁船の為のみにあらざるなり。宮は多嶋山に村社八幡宮あり。神輿と高麗犬とに就て面白き口碑^{こうひ}(伝説)あり。寺は、覚泉寺西蓮寺あり。覚泉寺は、文禄年中三隅の遺臣塩谷與三郎開基し、西蓮寺は、永禄年中武士栗山

七郎右衛門開基せりと云う。古城址茶臼山は、西隅村との界に在りて、三隅の支城なりき。青浦烈婦の伝説耳を傾くべく、美濃郡高島は、一衣帯水を隔てて、応呼の間に横倒れり。

◆須津港

西風と北風とを防ぐため、矩形の防波堤を築けり。東風は、岬と數個の島とによりて自然に防止せらる。此防波堤は、国庫支辨、又は県經濟にて行かうが如き大規模に且つ堅固になすこと能わざれば、^{あた}観音崎青浦山をして西風の保障たらしめ、大島の北風の保障たらしめたり。大島は陸地を距る五町、周回亦五町なりと云えど、打見たる所、尚大なる様に見ゆ。老松稚桜數百株あり。清水湧出す。別に歌松島、^あ疊ヶ瀬等の名勝あり。

◆青浦烈婦

古、青浦に婦人あり。夫、海に出で、暗夜暴風にあいて死したりければ、婦悲^や歎遣る方なく、謂^いえらく、^(おも)餓死して靈火となり、以て海上難にあう人を救い、後人の悲を免れしめんと、乃ち海に投じて死せり。浦人其志に感じ、観音を安置して其靈を慰めたり。故に暗夜シケの時は、青浦山観音崎邊に燐火見はると、これ航海者の謎なり。真に火見ゆるとせば、不知火、龍燈の類として、学者の研究資料たらん。若し火見えずとするも、日本武尊の妃、弟橘姫の如き烈婦ありしを知ると共に、古人の思想を^{うかが}窺うべし。

35. 三 保 村

古市場・西河内・湊浦を合併して、三保村と云う。明治廿年六月西河内と湊浦と合併して、西湊村をなし、廿四年七月古市場西湊組合併をなししが、明治四十三年十月三保村となれり。

樺太出漁団千本組は、明治三十八年八月、戦役後直に組織せられて、大阪以西に其類なかりしかば、世評高かりき。古湊漁業組合は、農商務省より優良と認められ、本県水産組合より表彰せられたり。湊浦魚招林は、二宮村の砂防林と共に、大成功と称せらる。福浦漁業組合には、漉海苔検査法を実行せり。以上は漁業方面の活動なるが、農業方面にも、耕地は西河内・古市場西部。同東部等、揚水機迄据附けて、整理せられ、

製紙の業も注意せらる。宮は郷社八幡宮あり、寺は極楽寺・禮光寺・明光寺等あり。針藻山の景画けるが如し。^{けしきえが}

◆清水山極楽寺

浄土宗にして、往昔、三隅上市字清水に在りて、開山は記主禪四師なり。三隅戦争の際兵火にかかりて、堂宇爆失し、唯本尊及開山の像のみ持出せり。後、湊浦の信者尽力して再建す。石見三十山番所の内なり。

御仏の 弘誓の船の 湊寺 あゆみを運び 倒れ彼の岸 (御詠歌)

◆八幡宮

湊に在り、三女神・神功皇后・応神天皇・武内宿禰を祭る。三隅城主世々の崇敬深く、神領寄附書数々あり、明治八年七月郷社に定めらる。

36. 三 隅 村

毛利領の時より大名時代にかけて、岡崎村と称えしが、村制実施の際、国司時代の郷名にして、且忠臣三隅氏によりて、広く世間に知られたる古名三隅に復せり。

三隅の地は、上古国造時代小野族に依りて、開かれしものの如く、中古国司時代は、巖として三隅郷あり。されど日本全国に其名を知られしは、中臣三隅入道を俟ちてなり。割拠時代高城の名高く、大名時代亦三隅組の中心たるを失わず。本居宣長の国学復興を称降るや、三隅には大橋仰軒等十数人の学者輩出し、明治維新に会するや、米原玄仙・財間隆法等首唱して、逸早く学校を興し、之を承(受・請)くるに質実教育者齋藤彌作等を以てし、三隅は郡西教育の一中心たりき。那賀郡西部七箇村聯合青年団の統一的活動、其困難無きにあらざるなり。宮は二宮神社あり。寺は真言宗正法事・真宗正楽寺浄蓮寺等数多し。

◆三隅氏

鎌倉幕府紀に於て兼信立家してより、割拠時代末、隆繁屠腹落城に至る迄、世を伝うる十數、年を経る参百余。其間、兼連・兼春の精忠無二・鐵石の心腸は、足利の威武・師泰の大軍も、動かす能わず、史家(国史

眼著者等)をしし「師泰兵を石見に頓し、尊氏の勢沮喪す」と書かしめし主導者、則ち師泰の兵勢を頓挫せしめし者は、三隅氏に外ならず。元龜元年毛利方に攻められ、飽く迄奮闘し、斃^{たお}れて後已みし隆繁・国定、あわれ石見の花と散りにし三隅氏兄弟。墓は正法の近傍に在り。

近時、高城々址に、三隅氏精忠碑を建てんと、西部七箇村聯合青年団・三隅同窓会等尽力すと云う。恰當の美擧たり。三隅氏の記事は、郡史に詳なれば略す。

石川の 海は絶えて 無き世にも たてし其名や 絶えせざらまし

37. 芦 谷 村

古老の伝説に、今より三百年前は、一円老杉古松繁茂して雲に聳^{そび}え、葛蔓岩石に纏^{まとい}い、谿間^{ことごと}悉く芦を以て覆われ、絶えて人跡なかりしが、一人の開拓者ありて、宇本谷地藏ノ町に一小屋を構えてより十數年の後、一部落をなすに及び、芦の叢生に因みて、芦谷と名つきたりと云う。三百年前、一跡未だ印せずとは思えあざれど、村名の起原は實に此説の如くなるべし。近時井野村と組合村をなせり。

嘉吉元辛酉(2101)年、龍雲寺が、此村に移されし事実と、寛文四甲辰(2324)年、幕府より松平周防守に渡し、目録中、蘆谷村あるとを対照すれば、余り新しき村とは思われず。割拠時代三隅氏の家来に、芦谷庄司某と云う者あると、秀吉朝鮮征伐の時、芦谷より軍夫の出でし伝説あるとは、確証にはならざれども、當時戸数甚だ僅少なりとも思われず。察するに、三隅城の隆盛につれて、発達せし村なるべし。

◆龍雲寺

弘和(偽年号永徳)二年、美濃郡種村にありし一教院を龍雲寺と号し、無端祖環を開山とす。祖環は峨山十傑の一人にして、学徳深高の聖僧なり。第三世日昭和尚の時、三隅能登守信兼の本願に依り、嘉吉元年今の地に移れり。元龜元年兵火にかかりけるを、第十八世円山再建せり。第三十二世崑和尚、浜田城主松平周防守の信頼を受け、転封の際、城主の菩提寺たりし長安院の建物を付与せられ、天保十一年建設せるが、現今の堂宇にして、宏壯見るべきものあり。元禄享保の札所の一たり。

◆崑山和尚

長浜村の出身にして、温厚篤実言行一致、博愛の心深く、人に接するに欣薰寛恕、胸襟常に洒落たり。夙に殖林に意を注ぎ、年々杉苗數千本植ゑて、現に鬱蒼たり。近郷称して活佛と云う。

38. 井野村

井野村は、鎌倉幕府紀・吉野朝廷紀には、井村と書いて井ノ村と読ませたり。大名時代には井野村と書き、津和野領なりき。室谷は、浜田領なりしが、明治十八年頃は、井野村と聯合役場を立て居れり。明治廿二年、合併して井野村となり、近時芦谷村と組合村を組織せり。

鎌倉幕府紀の末、三隅三代信時子兼連の弟兼冬、井村に分家せり。井村三郎兼冬是なり。吉野朝廷紀には、井村石見權守兼雄あり、朝廷派遣の武将新田義氏を助けて、小石見城を守り、以て勤王の誠を致せり。井村城亦屢々敵の鋭鋒を受けたり。割拠時代には、三隅周布両家の分領する所、大名時代には、井野は野地三浦氏庄屋たり。津和野領の飛地にして、四面他領なれば、自然奮闘を要せしなり。現今井野・黒澤二村が、郡内製紙界の大關たる全く故なきにあらず。室谷は大麻山神社あるを以て名高く、井野は敬神の念厚きと大糞山のあるとを以て著わる。串崎彌二郎・大竹兵衛九郎等の古武士、郷社八幡宮・村社春日社、曹洞宗報恩寺・真宗明覚寺、皆相当の史話を有せり。殊に、古明家の胡瓜を作らぬ由来は、郷土研究家の好資料にして、柚ノ木彌九郎の伝説、全く架空の話と云うべからず。(兼冬ぼつねんの歿年を延應元年とするは、延慶の誤なり。これと関係ある寺社の縁起、時代に注意するを要す)

◆大麻山神社

式内社にして、天日鷲命を祭る。慶長年間大久保石見守より、三十四石三斗五升の社領打渡あり。別当尊勝寺には、享保年間松平周防守より、周防吉地に於て寺領を附せられ、大麻山神社の待遇は、二宮・三宮に匹敵せり。今は郷社なれど、参拝者の多きは昔に変わらず。

◆古明家

昔、殿河内石浦嶽うわばみに蟒蛇あり。湯坂に出で人を捕り食うこと屢々なりければ、里人之を恐れき。或は古明

某、頭は馬頭に似て、体は一抱程の松の木の横倒れるが如き蟒蛇、岩上に頭を擡^{もた}げて憩^{うわばみ}い居るを見れば、五人張の弓を取出し、背戸畑の胡瓜籬^{きゅうりがき}に據て、見事一発其咽喉部を射通して、之を殺せり。以後蟒蛇のたゝりにて、其血統の家にては、胡瓜・南瓜・隠元豆^{いん}の如き蔓草^{つるくさ}をば作らずと云う。其つくらずと云う植物が、皆舶来種なるを見れば、何か他に深き理由ある事なるべく、研究の結果、或は村史に一段の光採を添えることあらんか。

39. 大 麻 村

大麻山の北に在り、且昔より折居の大麻山と云えば、大麻山と当村とは離るべからざる関係あり。されば西村・折居・東平原を合して自治村をなす時、取って以て村名とせるなり。西村は、周布領の西村の意、折居は、大麻山神社の下居^{おりゐ}なるべく、東平原は、寛文・文化の文書、平原と書けり。岡見の西なる美濃郡の平原と区別する為、東の字を加えたるなり。

荒磯の武者藤蔦淡路は、朝鮮役に参加し、折居の清井常子は、宣長の門人にして和歌をよくせり。米かみ石・八人塚・塚松・力石の六地蔵等趣味ある伝説に富み、折居灘の風景は、行人をして一顧せしめ、燕岩の洞窟は、探検者をして或は快哉を叫ばしめ、或は五里霧中^{いせえび}に迷わしむ。殊に龍蝦の存在は、学海に一問題を呈出せり。

◆燕岩洞窟

孔口幅一間・高さ三間・深さ何程なりや、奥深く暗黒にして知れず、奥には砂利浜ありと伝う。夏は燕群巢を作るを以て、孔口に近けば、燕声^{やかま}喧しく、口耳相接するにあらずば、互に意を通ずる能^{あた}わず。

◆折居灘之景

海岸近く、弁天島・烏帽子島・鞍島等奇岩嶼あり。風景愛すべし。弁天島上に一老瘦松あり。其形^{あたか}恰も手を延べて招くが如く、樹下に巖島祠あり。地方人の崇敬厚し。烏帽子島は、烏帽子に似、鞍島は、馬鞍に似

たり。大麻比古命の御物なりと伝う。大麻比古命に、天日鷲命と同神なるか、又は其の御子なるべく、大麻神社の祭神を指すなり。

◆^{いせえび}能蝦養殖場

従来の調査書や学者の説によれば、日本海には能蝦は存在せぬものとなり居れり。然るに、大麻村海岸には能蝦を捕りて持居る者あり。海水其他調査の上、其適地なるを認め、伊勢湾の良種を放養せり。能蝦養殖場は、日本海にては稀有なり。(佐々木莊二郎)

40. 周 布 村

古の周布郷の地なれば、周布・日脚・津摩・治和・吉地を合併して、自治村をなす際、取て村名とせるなり、周布の名は、^{ほあかり}火明系^{すふむらじ}周布連より出でしならんとは、古来学者の説なるが、真ならん。^{ひなし}日脚はヒノアシの約音にて、八幡宮勸請につれて、宇佐八幡宮由緒の日足が地名となれるのみ。和泉式部に附會するは醜し。津摩は^{つま}端の意か、津の意か、静を静間と云う如く、マを添えて云うは、類多し。^{つまつ}抓津姫に関する如く云うは無下に排斥すべきにあらねど、江津と高津との間なれば、津間と云うと云うは、余に津間の多きを生ずるに至りて当らず。吉地は葦地なりしが如し。治和は維新後^{もんで}門田と三宅とを合せて名づけしなり。門田は周布城の門前の田か。三宅は古の屯倉ありし地ならん。

周布・石見二郷は、国造時代阿波忌部の植民地なりけん。火明系周布連の移住ありたりとせば、其れは、国司時代なり。守護地頭時代には、石見守護益田兼季の二男兼定、周布郷に分家せり。是を周布氏の祖とす。爾後三百年間、周布郷は鳶巣城下となりて繁昌せり。春日神社は、周布氏の氏神にして、八幡宮が周布郷の土地人民と密接なる関係あるは、日脚が地名なりしにても知るべく、聖徳寺は、周布氏の菩提寺なり。三郎左衛門の義俠は、元禄享保の遊治武士に一喝を喰わせ、雲亭大谷貞造の(指)南書は、専門書家を驚かせ、梧竹園桑原泰次郎は、維新前後の教育に功劳少からず、道林の桜は、樹数多からざれど名高く、耕地整理は、従来の平田をして一層美田とならしめたり。津摩の防波堤亦見るべし。

◆鳶巣城

兼定、周布に分家せしは、弘安役より少し前なれど、築城は、蒙古防備の時なるべし。兼定子なく、弟兼政をして家を続がしめたり。兼政は、弘安役に與りて力ありし人なり。(後文明の頃にも兼政と云う人あり、依て弘安の兼政を兼正と書いて區別せるもあれど、今は御神本系圖其他の古文書に従う)以て時代を察すべし。永久・文治の頃に、周布城主云々を伝うるは採るに足らず。吉野朝廷紀の事、周布和兼海外貿易に就ての活動等、郡史に詳なり。

◆八幡宮

日脚に在り、天上ヶ岡八幡宮と云う。周布郷の鎮守にして、周布氏の武運長久を祀り、明・朝鮮貿易時代には、特に崇敬を極めしが如し。寶物中、朝鮮人の寄附せしと伝うる獅子頭あり。城主寄附の太刀二振あり。刀身に弾痕附けり。朝鮮役に使用せしものならんとの専門家の談なり。

◆聖徳寺

興国山と号す。曹洞宗なり。元亨四甲子(正中元)年、周布家四代兼信^{けんしん}入道(実名兼家)封を割きて寺領となし、禪刹を興せしが、後衰へしを、洞雲湖泉禪師中興せり。周布氏長州に退きてより、再び頽廢せしを、泰屋雄禪師、二十星霜の苦心經營の結果、寛永三年再興せり。境内に周布氏の古墓あり。石州三十三番札所の一なり。

◆三郎右衛門

其先を周布鍋壽丸長春と云う。(毛利服屬後は長春とも書きしが如し)慶長二年八月九日七十七歳にて卒せり。日外是閑居士と号す。長春の妻名は徳、小笠原長徳の臣大島和泉の女なるが、小笠原氏に養われて、周布氏に嫁せしものなり。裔孫吉地に住し、吉地村庄屋を勤め、兼て原井組大庄屋たり。曾孫三郎右衛門仁慈義侠、吏に悪まれて、享保八年三月六日刑死せり。事郡史に在り、口碑にも噂灸すれば略す。(大島系図には三郎右衛門を長晴より五代目に書けど、三郎右衛門の讓状に曾祖是閑居士云々の語あれば、それに従う。)

41. 漁 山 村

村の東南隅、高城村杵東村との境に漁山と云う名高き山あり。田橋・横山・^{いちいたばら}櫟田原・鍋石を合せて、自治村をなす時、取りて村名とせり。鍋石の名は鍋の形の石ありて、村名神聖視すれば、自然地名ともなりしなり。横山は、横山と云う小丘より出でたる名なりと云う。田橋・櫟田原に就ても説はあれど、定かならず。古、周布郷に属せり。

河野一族と称するもの、石見にても少からざるが、本村の如く確かなるは多からず。先ず村社大三島神社あり。これ河野族の氏神なり。河内十内の如き勇士を時々出せるも、隔世遺伝と見るべく、国学者藤井宗雄亦河野血統なりと云う。一族鰻を食はぬと云う習慣を保持するに至りては、愈々疑を入るゝに余地なからしむ。昔は鍋石の於^あ藪とて、官有竹林あり大なる竹ありしが、今は伐採せられて、小竹繁茂せり。又石津平造の造林成功せるあり。

◆河野十内

野坂峠に大入道出づとて、諸人恐怖して気を失い、或は悶絶^{もんぜつ}して終に死する者ありき。于爰^{ゆく}、河野十内通勝と云者、日ごろ大剛の者なりけるが、或夜、住所鍋石と云う所より、供をも連れず唯一人、三尺許の太刀を帯び、彼の野坂峠にの登りけるに、果して六尺余の大入道、右の手に杖をつき、道中に立ち塞がれり。其の様、目は日月の如く輝き、口は耳の根迄切れ、面体は黒きこと炭の如し。如何なる者も魂を失うこと理也。されど十内は、この入道を見るや否や、立ち寄って抜打に、左の肩先より袈裟切に切付けしに、手応あり。夜明て至り見れば、峠に立給う地蔵、二つになりて倒れたり。于今彼の地蔵、二つになれるまゝなりと、浜田領分道の記にあれば、其村人及び野坂の人に問うに、其話は違はざれど、切られし地蔵は如何になり給いけん。二度も尋ねしかと見えざりき。

◆藤井宗雄

文政六年正月五日鍋石に生る、幼名を百三郎と云い、後恭平・耕作と云いしが、終に名乗の宗雄を本名とせり。見たりし時、松田春平(国学者系統表の岡部東平)の国体講演を、同村世並屋に於て聞き、大人の如く、傾聴せり。彼見必ず大器たらんと、春平浜田に帰りて語りき。幼より学を好み、河野通機に就きて学ぶ。此

の時世並屋は、盛に鉄山業をなし、浜田領内にて、「一で跡市小田澤津、二では鍋石世並屋江尾」と云われし富豪にて、主人江尾兼参は、時々商用を兼ね、京坂に上りければ、本居平田諸大人の書にて版本なるは更なり、高価なる写本をも購求し帰りて学ばしむ。文久二年、野々口隆正の此の地方を通過するや、大国村まで随行して、講演を聞き、不審を質せりと云う。慶応二年庄屋役を辞せしが、明治元年、更に栃木鍋石両村の庄屋を命ぜられ、三年切に乞いて罷役し、是より益々皇典講究に心身を委ね、敬神崇祖尊皇愛国、斯道の為め、石見の為め、尽瘁せし功勞、甚だ多く、遂に神道大教正となり、明治三十九年十二月十四日八十四歳の高齡を以て歿せり。

42. 大 内 村

大内村おおうちとは、昭和廿二年、内ない・内田・穂出を合せて、郷社八幡宮の天文六年の棟札おおないに大内村とあるを取りて村名に定めしなり。棟札に大内村と書けるは、内村と云う褒め称えて云えるにて、周防の大内と関係あるにもあらず、又常の村名にもあざりしなり。内田は、内村の枝郷なりと云わるれど、正史に出でしは、内田の方前にして、吉野朝廷紀に既に見られたり。然るに後の寛文印知集に、内村・中場・和田などありて、内田なきを見れば、村名中絶せりと解すべきか。穂出は、明治八年、中場・和田・吉地を合せて命名せしものなるが、後に吉地のみ周布村に入れり。国司時代には全村周布郷の内なりき。

延元二年五月、石見の官軍三隅信性・高津道性・周布兼茂・内田彦太郎等の長門に攻入りしは、大日本史料に載する所、其の中、周布兼茂とあるは、周布四世兼信入道兼家の庶長子にして、後に内兼次の養嗣子となりし者、内田彦太郎は内田の邑主なること明なり。是今より約五百八十年前の事に属す。宮は内に郷社八幡宮なり。内田に村社みかもと三家元神社あり。寺は護国山長福寺あり。古くは、牛尾茂七郎弘実の仁慈・長見善左衛門の仁侠あり、近くは小川一藤太の公共事業に尽せるあり。平家窟・髻谷・獅子岩等の名所旧跡及び鉾泉浴場あり。一ノ瀬枇杷は味甘し。発電所は、郡内電灯の源泉にして其名高く一覽の上鉾泉に入りて帰る客多し。

(字和田の大野という家に、菊池氏の感謝状を持てり。千田の大野近重氏も、菊池より出でし重富黨なれば、何か深き関係あるべし。)

◆八幡宮

高井山に在り。もと宇佐より田橋宮ノ尾山に勧請せしが、宮の後山が潰えしに依り、當処に遷せしなりと伝う。天文六年の再建の棟札に、石州那賀郡大内村高井八幡宮大旦那内信濃守兼康とあり。境内に繁茂し、周囲二丈余の老松あり。遠方より見るも其宮山なるを知るべし。

◆護国三長福寺

八幡宮の向いに在り。弘安年中蒙古調伏の為め創建せらる。開基は石見守か、石見守誰か、鎌倉派遣の武将か、特志愛国者か。俗名不明なれど、法名は護国院殿智光道心大居士とあり。これも年経て後の諡号なるべし。正応元戌子(1948)年十月廿九日亡す。此頃天台宗なりしが、大通和尚臨濟宗に改む。応永三丙子(2056)年十一月十三日寂す。境内に舍利塔あり。

◆長見善左衛門

内村庄屋たりしよりが、深く人民にを愛し、安く村内を治め、長福寺及び八幡宮の再建には大に力ありきと云う。享保の初め、春定用捨を願出でしに依り、享保二年二月庄屋を罷め、四月追放の身となり、同八年六月三日熱田村福井にて死せり。正嶺善味信士と号す。

43. 長 浜 村

昔時、海岸一帯白砂長く連り、東西来往の旅客、皆順路を此処に取れり、何時となく長浜と云いけり。その普通名詞が、又何時となく固有名詞となりしなり。明治五年の地震に地盤陥落し、長き長浜も名のみとなれり。熱田は寛文以後の長浜の分村なるが、明治廿二年三月復古せり。国司時代には全村石見郷の内にして、永く小石見の名は残れども、鎌倉幕府紀の中頃より、周布氏の勢力範囲に属し、以て割拠時代の末に至る。

四百六十余年前より、周布氏海外貿易をなすに当り、使用せし港津は長浜港にして、貿易品は、主に長浜刀剣なりしなり。当時の長浜は、全く商港なりければ、口碑伝説皆航海刀剣に關し、「大島、小島の九州瀬戸内海より漂流し来り、神木大榎に觸れ、或は碇島に当る時はシケとなり、天神様が刀工の向鎚を打ちたまひし」など云う話は、そのかみの様を語るものにあらずや。又浜田領分道の記の金雞物語は、明と貿易せし證話ならずや。大島の天満宮は、景色の佳なると祭のにぎやかなるとを以て名高し。寺には訂心寺・福恩寺・禅

床院等多し。長浜刀工の名は郡史に掲げられたれば省略し、次に金雞物語・長浜人形の来歴などを述べん。

◆金雞

長浜に到れば、寶幢寺と云う真言宗あり。後方三町程行けば、蛇島と云う所あり、昔周布權太郎兼綱と云人、入唐して、金の雞一番い、並に正徳寺(周布聖徳寺)へ奉らんとて鐘一つ、船に積せ、此処迄歸りしに、海上俄にわかに荒浪立ち、彼の船を水中に倦き入れ、金の雞鐘共、奪い取りたりと云い、今に彼の水底に鐘有りと云えり。又此処にて雞の声を聞く人其座を去らず死すと言い伝う。(浜田領分道の記)

◆長浜人形

大名時代の初め頃、永見房造と云う者あり。人形を焼き初めけるが、三代房造に至り。明和三年、嘉久志彫刻家巖(清水富春)に就きて研鑽する所あり。大に長浜焼の声価を高めたり。四代房造、亦彫刻製陶の術に巧なりければ、浜田侯の紹介を受け、津和野楽焼の法を学び、又九州を視察して、絵具に付自得する所あり。事業の拡張を計り、子孫其業を継ぎて今に至る。別に木島家あり。五代房造依り傳授を受け、現今技術製造高共、宗家を凌ぐしのに至れり。目下産額年々一萬円。

◆大島

海岸近くに在り。風光明媚にして島中天満宮あり。陸に面せる方は樹木繁茂せり。島後に平坦なる岩床あり。東西六十間南北二十間。名附けて千疊敷と云う。三階山・浜田市街・瀬戸・柳・馬・伊勢の諸島を一眸に集め、眺望甚だ佳なり。大島・小島・宝幢寺鼻等は海水を擁して長浜灣をなし、船舶の碇泊に便ならしむ。

刀頭賦罷晚憑窓、古寺鐘声雨裏撞、三面皆山環水市、依稀風景似瓊江。有馬鶴南
一帶人家枕翠灣、漁船商船後先還、此中尤有風光美、天満島浮青浪間。佐々木西湖

みはしやま

三階山と云う名高き山あれば、明治廿二年、細谷・長見を合せて一村となす時、取りて村名とせり。国史時代には、長見は半ば周布郷に属し、残半部と細谷とは、石見郷に属せり。割拠時代には、長見は周布氏に、細谷は岡本氏に領有せられ、大名時代には、長見は津和野領、細谷は浜田領なりき。

皇室御用として御買上の栄を得し三階百合と、歌名所なる三階山とは、本村を世に紹介せり。三階山神社は無格社なれども、参詣者多し。長見の古墓と細谷の大地主(古勇士の墓)とは、永く保存すべきものとす。

◆百合 三階百合の本場細谷には、百合栽培組合ありて、益々品種を改善し、声価を高めんことを勉めつゝあり。大正三年十一月、皇室御用のため御買上の恩命に接せしは、石見にては、三階百合と三瓶山葵なり。年産額二千円に達せざれども将来発展の見込みあり。

みはしやま

◆三階山

俗に坂山とも云う。歌名所にして、頂に登れば、東は出雲の日の御崎より、西は長門須佐の高山こうやま、南は連綿たる中国山脈に至るまで、眺望を欲しいままにするを得、ナギの石見瀉、シケの日本海、雨奇晴好其景尽くことなし。

那 賀 郡 歌

文学博士 松 本 愛 重

朝に仰ぐ三階山	國の鎮めと彌高く	夕に向ふ石見瀉	君の恵と彌深し。
霜に嵐に将雪に	色も変らぬ峯の松	是ぞ雄々しき吾友の	操の色を示すなる。
寄せ来る浪と戦ひて	缺けず崩れぬ磯の岩	是ぞ雄々しき吾友の	學の様を示すなる。
やよ吾友よ諸共に	いよよ進みて國のため	眞心こめて勉むべし	眞心こめて勵むべし。